

石田収蔵の野帳等資料の紹介(2) 1907年の樺太南部の先住民族調査に関する記録

Fieldnotes by Shuzo Ishida (2)

- Sketches and Notes About Indigenous Peoples' Life in Sakhalin in 1907

是澤櫻子 (KORESAWA Sakurako)

国立アイヌ民族博物館 研究員 (Research & Curatorial Fellow, National Ainu Museum)

田村将人 (TAMURA Masato)

国立アイヌ民族博物館 資料情報室長 (Head, Division of Collection Management, National Ainu Museum)

細縦雄貴 (HOSOMOMI Yuki)

板橋区立郷土資料館 学芸員 (Curator, Itabashi Historical Museum)

キーワード：石田収蔵、野帳、樺太、先住民族、アイヌ、ニヴフ、ウイльта

Keywords: Ishida Shuzo, Fieldnotes, Sakhalin, Indigenous Peoples, Ainu, Nivkh, Uilta

1. はじめに

石田収蔵(1879~1940)は、東京帝国大学人類学教室の大学院生として坪井正五郎(1863~1913)に師事しながら東京人類学会の幹事などを務め、現地調査によるスケッチやメモ、撮影技術を用いて樺太¹⁾南部のアイヌ、ニヴフ、ウイльтаの生活を記録してきた。生涯にわたり計5回の樺太調査を行った石田は、3冊の野帳(フィールドノート)を残している。本稿で紹介する「野帳1 樺太調査野帳」(板橋区立郷土資料館所蔵)は、石田が1907年の坪井正五郎の樺太調査に写真係として同行した第1回目の樺太調査の記録をおさめたものである。現地調査を主な研究手法とする人類学の黎明期の一次史料としてその意義は高く、本稿では野帳に書かれた内容を翻刻および公開し、同史料の活用を図ることを目的とする。

2. 解説：「野帳1 樺太調査野帳」

翻刻した「野帳1 樺太調査野帳」(以下、野帳1)は石田の1907年の調査期間中に記録されたもので、板橋区立郷土資料館が所蔵している。縦1500mm×横900mmで62頁ある。野帳1は、敷香の記述がはじまるおよそ26頁目を境に、それ以前はアイヌ民族、以降は

ニヴフ、ウイльтаに関する記述が中心になっている。

野帳1が記された1907年の調査については、石田の文章「樺太紀行」(上)・(中)・(下)(『東京人類学会雑誌』265~267号)がその全容を語っており、先行研究では小西雅徳氏が詳述している(小西1996, 1998, 2000, 2004)。1907年の調査に関連する一次史料として、本稿で紹介する野帳1(板橋区立郷土資料館蔵)、葉書資料4枚(板橋区立郷土資料館蔵)、調査協力の依頼を仲介する樺太庁の紹介状(板橋区立郷土資料館蔵)、複数枚の写真資料(アイヌ民族文化財団蔵)がある。これらの記録によると、東京帝国大学理学部人類学教室の坪井正五郎を筆頭に、野中完一、石田収蔵、ニッ家仁太郎ら4名は、1907年の主に7月から9月にかけて樺太南部の東西両海岸を調査した。坪井、石田は東京帝国大学の官費で調査に来ており、坪井は「本邦石器時代人民は何種族なりしかの疑問」に関する「由来研究」のため、貝塚の調査等を主な目的とした²⁾。一方、石田はアイヌ、ニヴフ(「ギリアーク」)、ウイльта(「オロツケ」)などの「分布」や状況の調査を行うことを目的としており、特に写真係としてその「容貌風俗等」を記録することを期待された³⁾。野中完一は二條家銅駝坊陳列所から資料収集を目的とした派遣、ニッ家は石田の助手として調査に参加した。1907年の調査はアイヌ語研究者の金田一京助、地質学者の下斗米秀二郎らと同行する場面もあった。既に指摘されている通り、

1907年の調査は漁場のネットワークをベースに行われており、板橋区立郷土資料館では坪井や石田の調査の便宜を図るために樺太庁職員が各地の漁場主宛に発行した紹介状などが確認されている(小西2004)。

今回の野帳1の翻刻により「樺太紀行」に記載された各地の漁場主の名前と突合可能な部分があることが分かった。よって、本稿では野帳1に記載された地名と「樺太紀行」(石田1908a-c)を突合し、野帳1の各頁の概要と石田の調査行程の関連について表にまとめた(表1)。これにより、当時の和人研究者らの樺太調査を可能にした行政と漁場のネットワークを更に明らかにすることにつながると考える。

また、野帳1のうち樺太アイヌに関するものについて、ごく一部ではあるが説明を付しておく⁴⁾。既に佐々木利和(2000)の論考で言及されているものもあるが、本稿では筆者らが特記すべきと判断した事項について翻刻やスケッチの内容に基づいて記す。例えば野帳1には、樺太アイヌのあいだで鯨の骨が犬櫓の滑走板として用いられていたこと(2頁)、家族が多い場合はチセ(家屋)のなかの炉が2つつくられたこと(10頁)、ホホチリに関する記述(15頁)、家の梁に犬の血で文様を描くこととその文様のスケッチ(15頁)、小田寒で招待されたクマの霊送り儀礼に関する記述(17-20頁)等がある。

〈ホホチリ(額飾り)〉

野帳1の15頁は相浜から小田寒へ向かうなかで記録されたものであり、その中にホホチリの記述がある。ホホチリは、樺太アイヌの子どもが身に着けていた額飾りである(田村2022)。細かいビーズの玉をつづり合わせたり、布に縫い付けてたりして三角形型にしている。野帳1には「子供用小弓ニテ何ノ鳥デモ一疋捕フレバ一人前トナル故コノ髪ヲ剃リ落ス ソレ迄ツケテ置ク」とあり、子どもがはじめて自分一人で動物を射られたときに一人前の証としてこの飾りを切り落としてもらうことが分かる。また「次ノ弟ニツケテモヨシ」「又タ小供生レタ時 昔ヨリ傳ワリタル故 着ク」と書いてあることから、切り落としたホホチリは兄弟間や祖先の品として伝わっていたのかもしれない。ホホチリは現存する資料がごくわずかな数しかなく、世界的にみても貴重な資料である⁵⁾。石田はホホチリをつけた子どもの写真も撮影しており、その使用方法が分かるメモは重要な意味を有している。

〈家の梁に犬の血で文様を描く〉

野帳1のホホチリと同じ頁(15頁)に、家の梁に犬の血で文様を描くことについてのメモがある。この行為については、1906年に相浜の小田寒で生まれた樺太アイヌの男性による証言がある(北海道開拓記念館1973:17-18)。男性の証言によると、犬の血で文様を描くのは新築した家に魂を入れるためで、どの家にもあるというわけではない。位のある家にしかないもので、文様はその家によって異なる。また、文様をつける場所は寝床側の梁だけで、寝床を中心に上座と入口の方に描かれている。文様の数は3~4個で数種類を交互に描く。男性は魯礼と大谷でしかこの文様を見たことがなく、時代の変化のせい、自身の家を新築した際も梁に文様を描くことはしなかったようである。石田のスケッチは、相浜から小田寒へ向かうなかで記録されたと考えられ、男性が生まれた時期の小田寒近辺の記録として貴重である(田村2001:169-173)。

〈祖先の伝来品について〉

野帳1の3頁には、樺太アイヌが資料を手放さなかったことについて、「仲間間に制裁アリテ祖先ヨリ伝ワリタル物品ヲ他人ニ売り払フ時ハ人ニ笑ハル、ト云フコトヲ恐レ固ク守テハナサズ」と記してある。祖先から伝わった物品を他人に売り渡すことは人に笑われることであるため、決してそれらを売り渡さないと記述であり、これは後の1930~41年に樺太や北海道で多くの資料を収集した馬場脩の記述とも合致する(馬場1979:27)。また、野帳1の17頁には、6年ほど前に東白浦で火の不始末があり、多くの道具が焼かれ失われてしまったことが記されている。そのような中でも石田は礼冠やイナウなど信仰に関するものや、作成途中のマキリの柄やトナカイの鞍など生活に関する資料をいくつか収集しており、野帳3(未翻刻)に同じ資料と思われるスケッチがある。

野帳1はニヴフやウイルタに関する記述も豊富にあり、今後の専門的な検証が待望される。

3. 翻刻:「野帳1 樺太調査野帳」

翻刻について、以下のように凡例を記す。

- ・判読できなかった箇所は■にて示した。
- ・翻刻する上で註釈をつけた内容は〔 〕にて示した。
- ・先住民族の個別の家族に関するプライバシー情報や、身体的特徴に関する情報は、現時点では翻刻

して公表する必要がないと考えて割愛した。

- ・総じて、現時点から見ると不適切な表現も散見されるが、民族差別等を助長する意図がないことを申し添える。
- ・民族名称(「ギリヤーク」「オロッコ」)について、翻刻では石田の記述通りに記した。

謝辞

本稿は、国立アイヌ民族博物館調査研究プロジェクト2021A06「近現代アイヌ民族史(誌)と博物館展示をめぐる実証的研究」(代表:田村将人)、2023 B03「日露のアイヌ資料収集者の日記・書簡資料を中心とした20世紀初頭の樺太先住民族のコレクション形成史に関する研究」(代表:是澤櫻子)、2024A02「近現代アイヌ民族史(誌)論Ⅱ—「実践」から考える」(代表:田村将人)の成果である。

注

- 1) 本稿では、1905~45年の日本統治下におけるサハリン島北緯50度以南を指す名称として「樺太」を用いる。また、地名についてもアイヌ語を反映してつけられた日本語地名を主に用いることとした。
- 2) 執筆者不明(「AM生」)「坪井教授の樺太調査」『東京人類学雑誌』22巻256号、433-434頁
- 3) 前掲
- 4) 本内容は板橋区立郷土資料館の特別展示の図録の論考(是澤2025)で記載した内容を一部修正したものである。
- 5) 2024年8月には、ドイツ・ケルン市のラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館から国立アイヌ民族博物館へホホチリが寄託された。国内では北海道博物館に次いで2例目である。

参考文献

- 石田収蔵 1908a「樺太紀行(上)」『東京人類学会雑誌』23巻265号、257-266頁
- 1908b「樺太紀行(中)」『東京人類学会雑誌』23巻266号、302-305頁
- 1908c「樺太紀行(下)」『東京人類学会雑誌』23巻267号、341-346頁
- 小西雅徳1996「石田収蔵とカラフトの調査」『北方博物館交流』9、北海道博物館交流協会
- 1998「石田収蔵の南樺太調査について」、野村崇先生還暦記念論集編集委員会編『北方の考古学』、野村崇先生還暦記念論集刊行会
- 2000「石田収蔵 謎の人類学者の生涯と板橋」板橋区立郷土資料館
- 2004「東京人類学会と樺太調査行」、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(編)『樺太アイヌ民族誌—工芸に見る技と匠—』118-123頁
- 2012「石田収蔵と写真記録」、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『収蔵品目録7 石田収蔵旧蔵写真』、120-131頁
- 是澤櫻子 2025「石田収蔵資料にみるサハリン先住民族との関係史」、細樫雄貴(編)『樺太紀行—徳丸の人類学者と樺太の北方諸民

- 族—』板橋区立郷土資料館、94-105頁
- 是澤櫻子、細樫雄貴 2022「石田収蔵の野帳等資料の紹介—20世紀前半の樺太先住民族の暮らしの風景—」『国立アイヌ民族博物館研究紀要』(1)、186-220頁
- 佐々木利和 2000「隠れたる先達石田収蔵先生」、小西雅徳(編)『石田収蔵 謎の人類学者の生涯と板橋』板橋区立郷土資料館、106-112頁
- 田村将人2001「樺太アイヌにおけるイヌの「供犠」」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4、168-186頁
- 2007「温存された首長の役割—樺太庁が任命した樺太アイヌの「土人部落総代」について」『北海道・東北史研究』4、36-53頁
- 2022「樺太アイヌにとってのガラス玉・ビーズ」池谷和信編『アイヌのビーズ 美と祈りの二万年』平凡社、146-151頁
- 2025「樺太アイヌ、ニヅフ、ウイлтаの歴史と文化」、細樫雄貴(編)『樺太紀行—徳丸の人類学者と樺太の北方諸民族—』板橋区立郷土資料館、106-115頁
- 丹菊逸治2011「あるニヅフ人の戦前と戦後」『和光大学現代人間学部紀要』4、129-143頁
- 馬場脩1979『北方民族の旅』北海道出版企画センター
- 守屋幸一(編)2012『明治・大正期の人類学・考古学者伝 板橋区立郷土資料館所蔵 石田収蔵氏 旧蔵はがき資料集』板橋区立郷土資料館
- 北海道開拓記念館1973『北海道開拓記念館調査報告書第5号 民族調査報告書資料篇Ⅱ』、北海道開拓記念館
- 山本祐弘1968『北方自然民族民話集成:オロッコ・ギリヤーク・ヤクト・樺太アイヌ』相模書房

表1 1907年調査の主な行程と野帳1の該当箇所

日付	場所	内容	野帳1該当箇所	葉書、写真等 関連史資料
7月13日	大泊（コルサコフ）	大泊に到着。北方のソロウイヨフカ貝塚など「石器時代遺跡」調査を行う。		石田 1908a 葉書 No.671
7月16日	鈴谷（ススヤ）貝塚	ススヤ河口の貝塚を採掘。		石田 1908a 葉書 No.648
	大泊	コルサコフに戻る ※翌日ロシア人墓地調査		石田 1908a 写真 90031, 90203（推定）
7月20日	女麗（メレイ）	・金田一と別れる。 ・「遺跡探究の目的をもて」女麗に向う。その後、内音（ナイオンナイ）でも遺跡調査。		石田 1908a
		・ロシア人宅を訪問。 ・途中、ユカンケノレーチカという「由松氏」の漁場の上陸。その後女麗に帰着。「小倉氏」と別れ、大泊へ戻る。		石田 1908a
7月25日	豊原（ウラジミロフカ）	大泊から豊原まで鉄道で移動。豊原の旅館で理科大生の下斗米秀二郎（地質調査）に遭遇。		石田 1908a 葉書 No.669
7月26日	クレストイ	「空きし腹を」満たし、「土俗品の採集」。		石田 1908a 写真 90035、90064 （推定）
	大谷（バリショエタコエ）	大谷に到着。下斗米と別れる。その後、大谷から北に約三町行き、「樺太に於ける最南の」アイヌの集落で日が暮れるまで過ごす。	2-4 頁か ・この土地のアイヌがロシア人の影響を受けていること ・祖先伝来の品を渡	石田 1908a 写真 90085
7月27日	大谷	雨風が寒い中、合羽に身を包み再び集落を訪ね、半日見学。村の長は「オハイベカ」。	さないこと（売り払ったら人に笑われる） ・家の中、夫婦、食事の様子	石田 1908a

			・道具のスケッチ など	
7月28日	ガルキノ ヴラスコエ	一人で出発し、後で坪井たちを待つ。昼頃にガルキ(ガルキノヴラスコエ)に到着。「白水氏」という出張所所長の案内をうける。	5,6頁 ・道具スケッチ (ヘトムイエヘ、サヤウトゥルンペ、炉が2つあるチセの間取り) など	石田 1908a
	ニコライフ スコエ	白水氏の案内でニコライフスコエに到着。鱒漁の様子をみる。	7頁 ・道具スケッチ (ポンルイ、トララなど) ・人名: 千徳太郎治 など	
7月29日か 30日	ドブキー 栄浜 内淵	ドブキーにて2泊。「土人部落の訪問と竪穴調査」を「唯一の目的」とする。この間に栄浜や内淵も調査。	8-12頁 ・トンチに関するメモ ・「テー、ヘマタ」 (之ハ何ンダ) ・人数多い時は炉を2つ ・戸口記録に関するメモ など	石田 1908b 葉書 No.668
7月31日 か8月1日	相浜	相浜に向い、パフンケに会う。	12-13頁 ・育児(赤ん坊をあやす様子) ・水難で亡くなった人の財産の処理方法 など	石田 1908b
8月2日か	小田寒(オ タサン)	途中「赤松氏」の漁場で昼食をし、午後4時に小田寒到着。「六助」と会う。坪井ら一行と別行動をした石田とニツ家は、「霧の晴れ間をぬすみて、土人の撮影をなし、半日を費やし」た。「午後は六助に誘はれ、熊送る	14-20頁か ・道具スケッチ (ホホチリなど) ・犬の血の使用について ・クロユリを数珠状に繋いで乾かしたも	石田 1908b

		祝ひの席に列なつた」。	の ・クマの霊送り儀礼 についてのメモ（時 期、料理、儀礼など）	
8月3日	東白浦（シ ララカ）	二時に到着。「局長中山氏」が 宿を訪ねてくる。夕食後、野中 と共に「北敷町なるアイヌ町」 を訪ねる。この日、坪井は輪荒 で「石器時代遺跡」を探索し、 東白浦に帰る。	21 頁 ・風景スケッチ （シララカなど） ・道具スケッチ（櫛 など） ・クマの霊送り儀礼 についてのメモ	石田 1908b, c
8月4日	東白浦	「一行にとりては特筆大書す べき日」、坪井、野中と別れ、 単独で北に進むことを決意。 東白浦を離れ輪荒に向う。	22 頁 ・熊の骨の置き場所 ・道具スケッチ （真縫の渡舟場で出	石田 1908c
	輪荒（ワー レ）	輪荒の場主は「笹野氏」、釜風 呂につかる。翌日は雨のため休 息。	会った少女の耳飾 り)	石田 1908c
8月6日	真縫（マヌ イ）	ようやく雨が止むが天気は悪 いままのため、滞在を続け真縫 を訪れる。「土俗の調査と撮影 とに時を過ごし」た。		石田 1908c
8月7日	輪荒→辺計 礼（ベケレ） →フレチシ	晴れたため、輪荒から辺計礼を 経てフレチシに向い宿泊。 「内山氏」の漁場へ行く。	23 頁 ・風景スケッチ （フレチシに至るま で、入ろうとするこ ころ） ・海岸付近のイナウ	石田 1908c
		※新間、トイクシ村も訪問した か	24 頁か ・風景スケッチ （新間、トイクシ） ・道具スケッチ ・食べ物、味付け	
8月8日	フレチシ→ ポロナイ河			石田 1908c
8月11か	敵富内（ウ	敵富内に「西村」氏の漁場を訪	25 頁か	石田 1908c

12日頃か	ネ ト シ ナ イ) →内路 (ナヨロ)	問し、8月11か12日頃に内路に到着。内路畔の集落は漁期のため無人化していた。	・風景スケッチ (コタンケシ岬) など	
8月12日以 降か	内路→敷香 (シスカ)	「シスカ出張所長、成富氏」に迎えられる。敷香に「十有餘日」滞在。ニヅフ、ウイルタの調査を主に進める。この間、地学協会一行を迎えた。	26頁～ ・風景スケッチ ・道具スケッチ ・単語リスト など	石田 1908c
	多来加 (タ ライカ)	多来加訪問。「湖畔に石器時代遺跡を発見し、漁業家外川木田」の2名に歓迎される。また「成富氏」と船にのり海豹島へ行く。海獣の生態を学ぶ。	・トナカイの生態 (30頁) ・数の概念、顔の洗い方 (31頁) ・ニヅフの出産など (33頁)	石田 1908c
8月22日以 降か	敷香→ドブ キー→富内 (トシナイ チャ)	樺太庁警備船の雷電丸に乗る。途中ドブキー、モルドウイノワ湾にある富内に立ち寄り、「佐々木漁場の厚志によりて」、約1週間留まり、「土人部落に踏査を試み」た。	・木田氏から聞いた話 (41頁) ・ニヅフからみたアイヌの毒矢について (52頁)	石田 1908c 写真 90083 紹介状1通 (〔石田収蔵調査便宜の件ニ付書状〕_敷香支庁長・稲垣敏夫氏より) i046239
	落帆 (オチ ヨボカ)	「土人の漁業を観、傍ら撮影」をする。 警察署長からも厚遇を受ける。		石田 1908c
	大泊	その後、金田一、野中と再会。雷電丸に乗り、「樺太庁水産部員小山氏」と「船長弘田氏」の厚意で小能登呂岬(ノトロ)の灯台をみる。その後、大泊に到着。		石田 1908c

※石田収蔵「樺太紀行」(1908a,b,c)と野帳1(板橋区立郷土資料館)の記述に基づき作成した。

※葉書の番号は守屋(編)(2012)による。

※写真の番号は『収蔵品目録7 石田収蔵旧蔵写真』(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構)による。

※紹介状は板橋区立郷土資料館の資料番号。

<p>(下段)</p> <p>二寸 煙管ヲモテ 喫煙ス 入墨ハ上唇ノ一部ニノミ 飯鍋モ魚ヲ煮タル鍋モ其マハニ ヘラヲ以テ其傍ニ坐シカユノ如キ飯ヲ食シ居ル子アリ又タ魚ヲ手 ツカミニニシテ食シ居ルアリ 生鱒アリ カタバミノ葉アリ 魚ノ内臓ヲ鹽 ■構アリ 老女ノ入墨ハ完全 子供ハ耳輪 (男 24人 女 26人)</p> <p>シケニ</p> <p>二間位 一尺位ノ高サ ソコニ鯨骨ヲ用フ 木ニテトメル (木ノネジ)</p> <p>小供等ハ輪遊ビヲナス ニツコリ笑ツテノ歌ヲ知ル シントコ ケムシントコ 十三子ノ男子</p>	<p>野帳 1.3 (上段)</p> <p>此処ノアイヌハ一般ニ露人ノ感化を受け 其ノ性モ悪シクナリ人ニ接 スルモ高慢ノ風アリテ容易ニ言ヲ容レズ 又タ祖先傳來ノ品、 具を失ハザルベシ守ル頑風アリ衣服ハ一定セズ古キ洋服ノ スボンニシヤチノモノアリ又タシヤツツの見ル陰モナクノ汚レタル又破レ ナキモノハ如キヲ着ケタルアリ 坐スルニモ立ツニモ左手ヲ■ ニスル風アリ 小女ハ上唇ノ角ニ僅カノ入墨をなせり 何れも足 に用ふるものなし 物置小舎ノ柱ニ木材ノ円ク クリタルヲノセル 家ノ周囲ハ多ク木の皮、 屋根ハわら、 又は木皮、 板ニテ作ル 仲間間に制裁アリテ祖先ヨリ傳ハリタル物品ヲ他人ニ売リ扱フ時ハ 人ニ笑ハルハト云フコトヲ恐レ固ク守テテハナサズ</p> <p>左手ヲヒロシ 居 アル風</p> <p>一尺 チエベニボボ 丸クゲルン (C) 三四尺 イメシベ 二寸 プサコ フリユ (O) 食物一般ニ用フ チオイネ ヤル 大■ヤルモノ犬ニ食フ</p>
---	---

<p>野帳 1.1</p> <p>50 25 50 25 150 175 300</p> <p>ガノコウラシ イソツツシ サノノスケ シヤチエカシ</p> <p>長ノ名 ワシガヌ (三十一) ニコラノ (二) (二十七)</p> <p>外 トゥール (イナフ)</p> <p>壱 セルプトウ ゴヨー サリ一船板 (和?)</p> <p>爐 ブマックトゥ 火箸 シヤボー</p> <p>火ツギ ホウワ</p>	<p>野帳 1.2 (上段)</p> <p>其ノ状態 アハレム可シ 主水ヲ■子 ■■■■る 立ツテひしやく に水ヲ入レテ 持來ル主人 立膝ヲナシ 取リテ飲ム 妻ハ耳飾 ヲ付ケヒカ ケ前垂フ ナシ サビタ 製ノ長 ヲ</p> <p>新古■混 家ノ神 毎年一本ヅツヲ 加ヘル ツペウシベ 酒ヲ造リカモイノミを する時、加フル イゲーレツツ (船ヲ造ル) 廿寸</p> <p>セコマ (小熊■棒フ) 心 [芯?] ハトバマツノ枝 皮ハ■ 一般ニ怠惰ノ風 夫モ妻モ怠氣? ヲ帯ビ ダラシナキ爐辺ニ座 シ或ハ横臥シ何事モ為事? ナキモノ■■■■子モ之ニ同シク 遊ビマハリ居ルモノ普通ナリ 然シ子ハ朝早くボロヲ身ニマトヒ纏ヲ包シタル コモヲ背負ヒニ売リニ■■■</p>
---	--

<p>酒ヲカキヤワラスモノ トンゴリ ユウ 糸ハ織製ノ tendon</p> <p>ワリエ (オロッコ)</p> <p>煙管入 ガツモノ</p> <p>鱧ノ皮ニテ造リシ靴ヲカキ アザラシ皮ノ衣ヲ ワツコ イト (チライ) (鮭位ノ大サ)</p> <p>ニーボ</p> <p>只ター人ノ子供 (♂♀) ノミニテ 友達ナクササビシキ 時作り玩具ニサセル</p> <p>食用ノ油入 アザラシ膀胱</p> <p>ビセ ビセ</p> <p>一人ノアイヌをダラシク といふ。此ノ家は 父とも見ゆる老人と老母 と見ゆるものとあり</p> <p>ボリシヨエタコエ村家屋ノ一ノ板ナルアリ、柱ニブリキヲ巻キタルアリ 又タ全ク何ニモ無キアリ</p>	<p>孫 女 二 人</p> <p>娘 子 三 人</p> <p>男 五 人</p> <p>女 五 人</p> <p>男 三 人</p> <p>女 二 人</p> <p>妻 八 人</p> <p>日本人ハ牛馬ヲ置ク時ニ垣ヲ作レト露人ハ之ニ反シ作アスル処ニ垣ヲ結ビ以テ 牛馬ヲ防グ</p> <p>ロシヤ白</p> <p>一尺五寸</p> <p>二尺七寸</p> <p>一本ノ枝ヲ曲ケ</p> <p>一尺五分 一尺一寸</p> <p>厚三分 広八分 一尺一寸</p> <p>一尺五寸 二尺</p> <p>カツヨ 太鼓 (新ノ脚) musk deerノ皮或アザラシノ皮</p> <p>テヒヘネ</p> <p>■■■■ カツヨタタ</p> <p>板 アイヌ家 ムシロ 皮</p> <p>ワラ</p> <p>犬ハ唯一ノ財産</p> <p>短髪モアリ又タ</p> <p>銀 直 三 寸 三分</p> <p>洋 銀</p> <p>ガラス玉</p> <p>一般ニ b p ハ</p> <p>大ナリ</p> <p>内地ノ田舎ノトモニ</p> <p>アザラシ</p>
<p>(下段)</p> <p>ボリシヨエタコエの アイヌ村ニ至ル途にて</p> <p>ト、松ノ枝ノ輪</p> <p>乾カシタルアリ</p> <p>ふきヲ生テ食スル</p> <p>耳輪 (ニシカリ)</p> <p>セーグ (ワロッコ)</p> <p>皮ヒモヲ貫キ居ルアリ</p>	<p>野帳 1_4</p> <p>(上段)</p> <p>水ヲハハ小川ヨリ汲ミテ用フ 天祥ヲ用フ イナオニハ穴ノ頭ヲツク</p> <p>43 戸ノ中 露ハ 1 戸 日本人ハ 20 戸 トルコハ 4 戸 いもノ塊ヲ円ク作り</p> <p>乾カシタル形ハ黒バンノ如シ</p> <p>ヨハイベカ ペスタロニキイ</p> <p>カスターク 夫婦ト 娘四人</p> <p>リハカロク (ヲハト兄) 人</p> <p>人口総計五十人</p> <p>戸数七十</p> <p>妻ト男二人 同居</p> <p>ムコ、子、女 妹</p>

<p>孫 女 二 人</p> <p>娘 子 三 人</p> <p>男 五 人</p> <p>女 五 人</p> <p>男 三 人</p> <p>女 二 人</p> <p>妻 八 人</p> <p>日本人ハ牛馬ヲ置ク時ニ垣ヲ作レト露人ハ之ニ反シ作アスル処ニ垣ヲ結ビ以テ 牛馬ヲ防グ</p> <p>ロシヤ白</p> <p>一尺五寸</p> <p>二尺七寸</p> <p>一本ノ枝ヲ曲ケ</p> <p>一尺五分 一尺一寸</p> <p>厚三分 広八分 一尺一寸</p> <p>一尺五寸 二尺</p> <p>カツヨ 太鼓 (新ノ脚) musk deerノ皮或アザラシノ皮</p> <p>テヒヘネ</p> <p>■■■■ カツヨタタ</p> <p>板 アイヌ家 ムシロ 皮</p> <p>ワラ</p> <p>犬ハ唯一ノ財産</p> <p>短髪モアリ又タ</p> <p>銀 直 三 寸 三分</p> <p>洋 銀</p> <p>ガラス玉</p> <p>一般ニ b p ハ</p> <p>大ナリ</p> <p>内地ノ田舎ノトモニ</p> <p>アザラシ</p>	<p>孫 女 二 人</p> <p>娘 子 三 人</p> <p>男 五 人</p> <p>女 五 人</p> <p>男 三 人</p> <p>女 二 人</p> <p>妻 八 人</p> <p>日本人ハ牛馬ヲ置ク時ニ垣ヲ作レト露人ハ之ニ反シ作アスル処ニ垣ヲ結ビ以テ 牛馬ヲ防グ</p> <p>ロシヤ白</p> <p>一尺五寸</p> <p>二尺七寸</p> <p>一本ノ枝ヲ曲ケ</p> <p>一尺五分 一尺一寸</p> <p>厚三分 広八分 一尺一寸</p> <p>一尺五寸 二尺</p> <p>カツヨ 太鼓 (新ノ脚) musk deerノ皮或アザラシノ皮</p> <p>テヒヘネ</p> <p>■■■■ カツヨタタ</p> <p>板 アイヌ家 ムシロ 皮</p> <p>ワラ</p> <p>犬ハ唯一ノ財産</p> <p>短髪モアリ又タ</p> <p>銀 直 三 寸 三分</p> <p>洋 銀</p> <p>ガラス玉</p> <p>一般ニ b p ハ</p> <p>大ナリ</p> <p>内地ノ田舎ノトモニ</p> <p>アザラシ</p>
---	---

野帳 15
(上段)
高女 五尺八位 中一 間位

熊人シ
フミダン
(マアロイタコエにて)
窓
トルコ人 (ガルキに至る迄にて)
大 小 種々アリ

うまの 天井
を貯ふ
天井との間には牧草
此上に屋根あり 屋根と

アイ 三尺 マール
鉄 一丈二三分
厚サ七分

真鍮
ネトコ
火 火 食 道具
24ヶ
ミツ組
(ワロツコ) ノモノニアリ
ハ無ク

二倍半
二丈五分
二丈三分

四尺七寸
ミツ組
ハ無ク

カ
ワ
ウ
ソ
ノ
を
取
る

グ
||

(下段)
一厘銭
火 火 食 道具
火 (ワシ)

野帳 17
(上段)
ニコラエニスココエ村にて

フ
カ
ア
ヨモ 熊ヲ 捕ルモノ
G キヤンケs ガs ニケフ
O カタラキララサニ
フンベホニ (鯨)

水 舟ヲ 取ルモノ
シヨウフ (C)
モムタルス (C)

梅太郎ナルモノ
ひげヲ生ヤシ屋
モノ

ア
ザ
ラ
シ
ノ
皮
ノ
ひも
ト
ラ
ラ
ツ
キ
タ
三
四
寸

皮製
人物 (ポソルイラム)
砥石 (ポソルイ)

マ、ロウエチキノ
ミ
主
村
を
見
む

ア
ー
ロ
ウ
エ
チ
キ
ノ
村
に
て
見
な
る
屋
根
む
ね

ナ
イ
ブ
チ
村
ノ
仙
徳
太
郎
治
(三
七
八
才)
札幌
中
学
二
年
マ
デ
学
ベ
リ

(下段)

野帳 15
(上段)
高女 五尺八位 中一 間位

熊人シ
フミダン
(マアロイタコエにて)
窓
トルコ人 (ガルキに至る迄にて)
大 小 種々アリ

うまの 天井
を貯ふ
天井との間には牧草
此上に屋根あり 屋根と

カンゾ (黄)

遠山

ガルキ村入口

(下段)

野帳 16
(前段)
ガルキ村家のマドカケ (露)

丸木船ヲ松ノ根ニテシバル
家ノ如シ
ホニウエ

間ニ光ヲ入ルハコト

隠金体ヲ含ム
(ハトウモムエ) (ハト?ウムエ)

二十本ニテ一枚ノ
小板
黒
青玉

縫
自
二
青
玉

長二寸 中、七八分ノ板
帯ヲくト云フ
大ニ食ハス
ハライラモ大ニ食ハス
金 皮
暫ク日々乾カシタ後織ノ土ニツルシ管ヲ■製ヲナス

ナイブチ川
タコイ川トノ合一点

サヤ
ウトウルンベ
サヤト帯トノ中間ニアルモノト云フ意
白銅

白
青
青
太鼓ニケアリ

<p>昔シ トシチノ用ヒタル斧鍋ノ如キモノヲ見出シタ 四角ナ突ハ方ニアラシトシチノ住ミシ 穴ナリト云フ此処ヲ掘レハ石器土器ナド出ル シラ、カニ小高キ山アリ其ノ周囲 ニ深キ身ヲカクシ長サ百間モア孔ヲ掘リ回ラシトシチト戦ヒタル 此ノ 孔ヲボロキト云フ 四角ナ穴ヲトシチチセコフ (トシチノ住ミシ家ノ跡)</p>	<p>野帳 1.9 (上段)</p> <p>何レノ方ニニダタルカ分ラン フキノ話ハ無シ 土人モ穴ヲ掘リテ住ヒシ例アレ任深サ 三尺其ヲ木ニテ掩ヒ其ニ草ヲカブセ 其上ニ土ヲカブセル トシチノモノハ 一層深ク四尺位 トシチノモノハ海岸 或ハ平地ニアレ任 アイヌノモノハ 山ノ木ノ中ニアリ 数モアイヌノモノハ少ナシ 十三年前ナイブチノ林中 ニ此ノ穴居土人ハ一軒アリキ (冬期) 四月頃マデ此処に居リテ暖カクナレハ 海岸ニ出ル 周囲ハ一尺位高マツテ居ル (トソノ穴ハアイ村ニ近キ海岸) 昔ヨリ 手ニ入墨セズ 唯ダ手ハ痛ク 底ニ石ヲ敷イテ居ル 時ニ小サキ傷ヲツク出血サスル b p ニハ十二才ノ時ヨリ始ムル 始メ上下ニスル 専門ノ人ニヨッテナス 上ハ少シ大ナリ 皮膚ハ広マルニツレ色ハ薄クナル 耳孔ヲハ初メ針ニテアケ 其ヲ■ [金+公] ノ輪ニテハサミ置ク 輪モ先祖伝来 ユリ、サクラキガミ 加へ アザラシノ油ニテ煮テ食ス 木ノ frid ニシテ火ヲ■ イキサ (道具)</p> <p>カラニノ fibre ニテアツシ ストルキナ (サク) ミヨキガム カモイカラシク 一 天ヨリ賜リタルモノ 七八才ニナリ役ニ立ツ様ニナリ命名スル 名 メレコボ (女ノ子) イマレツブ (男子) 男女ニ係ハラズ 子供ヲ ヘカチト云フ</p> <p>産ノ時ハ近所五ニ世話ヲスル 難産ノ時ハ祈ヲナシ或ハサワグ 結婚ハ遠近ヲ論セズ 娘ノ親ノ方ニ種々ノ贈品ヲスル 結婚後ハ別々ノ家 イナオノ長キハ日ヲ祭ル 日モ一疋ノ犬ヲツケル 木ノ焼ケクツヲ棄テル処 小ナルイナオヲ立テル ウンジ アシンケ イナオト云フ</p> <p>春一回爐ヲ清ムル時 熊祭ヲスル処ハ山ノ中ニアリ 一定シテ居ル</p>
---	---

<p>廿九日 ニシハラレ 朝鮮人ノ妻ト云フ者 五十前後 日本語ニ明カナリ</p> <p>ドブキーに入る</p>	<p>野帳 1.8 (上段)</p> <p>アイヌハ冬期 アカ 用フル靴ノ中 green ニスルハ草</p> <p>アカヒモ サカエハマ アカヒモ 煙草人 冬 五 寸</p> <p>テ 之 一、何 マ、ダ タ</p> <p>scab to march トノ間ノ tat ラ一層ヨリ煮テ 粘着ノ用ニ供ス 妻ハ四十位 髪ノ毛ハ navy 黒 夫ハ五十位</p> <p>ノモノハ 一人前ノ 女ノ用フルモノ ニシテ未婚 女ハ之ヲ帯 ブル能ハズ 又タ未亡人 鞆ノミヲ 帯ブ</p> <p>銅 火打金 内ニ火打石 及ヒ木ノ腐敗 セルヲ入ルハ</p> <p>嘉慶通宝</p> <p>皮製</p> <p>エブルク</p> <p>サカエハマヨリ ドブキーに至る 途上</p> <p>(下段)</p>
---	---

<p>日ヲ祭ルハ春秋ニ度 シユメルングル (アイヌ)、シユメといふ処の人 オロツコ (自) オオラカダ (アイヌ)</p>	<p>野帳 1_1011 翻刻なし</p>	<p>丸太松ノ利用 破船の難に逢ひし件■ふ■となりし人の 生前有せし諸道具を死■たるもの其の 帰着せる船の一部及び死者へ捧げたるもの 部をきりて 屋根トせり 三尺位</p> <p>幼時ノ泣キ声ハ変ラズ左ノ側ヨリヲロシ左手ニテカハへ 右ノ横ニ両足ヲ入レ右手ニテ乳アサヲ含マス 女ハ坐マルニハ左足ヲ前ニ延バン右足ヲ屈スル 或ハ立テヒザヲナス時アリ 或ハ■</p> <p>(下段)</p> <p>家ノ根屋 (ママ) ハよしヌハ木ノ皮或ハムシロ logハ皮アルアリ無キアリ 半分ニワケタルモノモアリ 周囲ハ家内●又ハ木ノ皮</p> <p>一尺五寸 アイ村 バランケ 一間位 山ノ神 秋ト春ニ月ト一度</p> <p>ナイブチ渡船場 広 1丈 二尺位 ■ 1丈1尺 高 5尺 一 間 三尺</p>
---	-----------------------	--

<p>野帳 1_13 (上段)</p> <p>古舟ヲ利用セルモノ アイ村 バランケ</p> <p>ツラサム</p> <p>クロ ソラ色 白 アカ 地 ベニ糸 糸</p> <p>三寸位</p> <p>ク カ 色 ニ ア タ</p> <p>銅 木 角 金</p> <p>火箸 金ノカ (灰アルイ)</p> <p>木ニ作りタルモノ 長短アリ</p> <p>木ヲ細ク割リタルモノ 屋根ノ皮ハ十五年 モ堪ユル</p> <p>ケ グ リ タル モノ</p> <p>二寸位</p> <p>青ネツミ色 ニケ</p> <p>野帳 1_14 (上段)</p> <p>ウエオスモン 靴ニ入ルハ草</p> <p>ひげ ■ び</p>	<p>野帳 1_13 (上段)</p> <p>古舟ヲ利用セルモノ アイ村 バランケ</p> <p>ツラサム</p> <p>クロ ソラ色 白 アカ 地 ベニ糸 糸</p> <p>三寸位</p> <p>ク カ 色 ニ ア タ</p> <p>銅 木 角 金</p> <p>火箸 金ノカ (灰アルイ)</p> <p>木ニ作りタルモノ 長短アリ</p> <p>木ヲ細ク割リタルモノ 屋根ノ皮ハ十五年 モ堪ユル</p> <p>ケ グ リ タル モノ</p> <p>二寸位</p> <p>青ネツミ色 ニケ</p> <p>野帳 1_14 (上段)</p> <p>ウエオスモン 靴ニ入ルハ草</p> <p>ひげ ■ び</p>
--	--

<p>野帳 1.18 (上段) 四月ト十月ト二度外ニ出ス 熊ヲ料理セルマキリヲハフアナナ [?] へ箱ニスレインオニテ包ジ外ニイナオ (短キ) ト共ニカケテ置ク天気ヨケレハ</p> <p>キトビル ダイコ、イナホヲ田メテ入レハ 頭ニ孔ヲ石ニテアケ (男ハ右方、女ハ左) 脳ヲ出シ 村ニヨリ少シク異ル 八寸位 (火入レノ石) nose ニ入ルハ 熊ヲ捕ヘシハ ヤマンノト云フ人 (四十前後) エンコルスベ 新ニ熊ニナラスタメ 目球 (両側ノ短キ片ニツケ) 目球 エンコルスベ</p> <p>アル時ハ 酒と飯をそなへる 箸一本ヲツケ</p> <p>(熊ノ馳走) (下段) 老年の人々一列に並び熊頭の前ニ膳に盛りたる肉を三膳そなへる そこで膳を各人にくくばる (主人は) 各人まきりにて切りて食す 終れば下坐に居る青年及び小供に膳をくばる。 終ればゆり (はつ) とつぼこを煮たるものを に入れてへらと共にくくばる (頭を山に送りたる後なるものでは食事を外に出す事能はず) ゆりを食す 子供等は出づれば女は入り来りて (主婦は食フ) ゆり、つぼこ何れも湯熊に捧ぐるもの 膳にて 煮となしたる後あざ食フ外に らしの油にて煮る 串にさして与ふるもあり へらニアラ尽ク食す 草の葉にて手及び口マキリをふく 六寸ニ七八分</p>	<p>イノカ 死セル熊ノ かた</p> <p>チ ユ フ イ ノ 鉤</p> <p>青 キ レ</p> <p>イナナル (鉤ノタメ)</p> <p>足ノ皮、眼ヲ樺ニテ 包ミタルモノ ノ辺ニハ舌、耳ナド ヲカケル</p> <p>女客肉を終れば もろみをくばらるゝへら にてなめる</p> <p>酒は木ノどんぶり 茶碗、皿等ニ入るゝ 大なる鍋に飯とゆり (煮たるもの) とを等分に入れ油にてか きまはし膳に盛りて熊の廻に供ふ次で腕 [ママ] は 盛り男の客よりくくばり始める 客は同じくへらにて 食す 飯とゆりとはあらかじめ膳に盛られ備準され たるものなれば量は量に制限あり故に多く小供等に与ふ 主人は立つて頭の側に置かれたる酒瓶より麹少量を入るゝ客は順 次 [?] に熊の前にあぐらをかき へらにて碗の上を一まわり廻し たる後 一口に飲む三人にて終る (酒不足なるためか)</p>
<p>野帳 1.19 (上段) 女ハ皆ナ横ねまり 女ハ入口ノ前に坐す (左右トモ) 主人肉を膳に盛りて更に女客にくくばる 受けたる時は膳をさゝげて拝し 然る後食す 四時前の如きは 驚つかみとなしまきりにてけつづり食す 老客運はあぐらより変りて足を延ばし 自由になり 女客等の食 するを見る時々談笑する様集ニ骨槽 山盛りにされたる肉も またよく間に平らげらる</p>	<p>イノカ 死セル熊ノ かた</p> <p>チ ユ フ イ ノ 鉤</p> <p>青 キ レ</p> <p>イナナル (鉤ノタメ)</p> <p>足ノ皮、眼ヲ樺ニテ 包ミタルモノ ノ辺ニハ舌、耳ナド ヲカケル</p> <p>女客肉を終れば もろみをくばらるゝへら にてなめる</p> <p>酒は木ノどんぶり 茶碗、皿等ニ入るゝ 大なる鍋に飯とゆり (煮たるもの) とを等分に入れ油にてか きまはし膳に盛りて熊の廻に供ふ次で腕 [ママ] は 盛り男の客よりくくばり始める 客は同じくへらにて 食す 飯とゆりとはあらかじめ膳に盛られ備準され たるものなれば量は量に制限あり故に多く小供等に与ふ 主人は立つて頭の側に置かれたる酒瓶より麹少量を入るゝ客は順 次 [?] に熊の前にあぐらをかき へらにて碗の上を一まわり廻し たる後 一口に飲む三人にて終る (酒不足なるためか)</p>

<p>野帳 1.20 (上段) 主人は熊の komer の肉に下等の枝を挿しこみ nose ニイナオをさし 一度 は 小熊をあごノ下ニ台となし安置す 客の中の老人 (一定セズ) は立つて敷物 (木ノ枝) を東ノ窓より出す 主人はあらかじめ widow [ママ] ノ外に立つて 受取る 次で かけられたる イナオを出す 次で 頭を出し 次に 足、耳、耳の如きを出し 又た敷物を出す 俵にては口、手な どを ふきたる草や 料理の時用ひたる葉や枝の如き敷物 を一まとめに むしろに包み入口より出る 脳腔 [?] に入物をなし 家の内なる老人は小熊を頭の代りに立て其の両側には前に 壁にかけられたる耳かくしの一■を取りて かける 此の小熊も同じく木ノ枝の小なるものゝ上に載せらるゝ之は暫くの間置かれ 女ハ脚絆をはく 小便をするには草原に入りかゝまりて便ずる 男子は海岸の草原近く かゝまりて大便をする</p> <p>小刀と共に箱に入れて棚に仕舞ふ</p>	<p>イノカ 死セル熊ノ かた</p> <p>チ ユ フ イ ノ 鉤</p> <p>青 キ レ</p> <p>イナナル (鉤ノタメ)</p> <p>足ノ皮、眼ヲ樺ニテ 包ミタルモノ ノ辺ニハ舌、耳ナド ヲカケル</p> <p>女客肉を終れば もろみをくばらるゝへら にてなめる</p> <p>酒は木ノどんぶり 茶碗、皿等ニ入るゝ 大なる鍋に飯とゆり (煮たるもの) とを等分に入れ油にてか きまはし膳に盛りて熊の廻に供ふ次で腕 [ママ] は 盛り男の客よりくくばり始める 客は同じくへらにて 食す 飯とゆりとはあらかじめ膳に盛られ備準され たるものなれば量は量に制限あり故に多く小供等に与ふ 主人は立つて頭の側に置かれたる酒瓶より麹少量を入るゝ客は順 次 [?] に熊の前にあぐらをかき へらにて碗の上を一まわり廻し たる後 一口に飲む三人にて終る (酒不足なるためか)</p>
--	---

<p>(下段)</p> <p>式様トシテ居ル</p> <p>シラハカに入る</p> <p>一本ハナシ ネルクム シ フ</p> <p>トナ (一般ノ名) フフク 連ふ■長クナレハ金■</p> <p>キテ (モリ) ドララ (ヒモノ) ドナ (橋) トナルクム (二本ノ時) トルクム (二本ノ時)</p> <p>アザラシヲ捕フル (氷ノ上ニテ) 時</p> <p>ラッハ 一丈モアル (何テモツク) 水面ニテ</p> <p>三寸 二尺 四寸位入 ニヶ処ニテ結ブ</p> <p>一寸</p>	<p>野帳 1.22 (上段)</p> <p>熊ノ骨ハ尺ク山ニ持ッ行キ イナヲノ</p> <p>七ハケ月位モ 傍ニ置ク (以前ハ棚ヲ作りテ載セタル モノナリト)</p> <p>シメシレハ [?] サルヲカセテ靴シタモノヲ用フ モノナリト)</p> <p>キレ 或ハ繩ニテ 山ニ送レニハ四五行ク 一定ノ場所ナリ</p> <p>ワ ー レ ー</p> <p>ア イ ス 村</p>
<p>(下段)</p> <p>マスイ村遊歩場にて吾等を渡し呉れし十四五才ノ一少女耳に飾れる 輪は■に■ふ思■や過くる日 貝塚にて発掘せるものと寸分違はざ る事を見せり — 半透明にしてギョクの如きものに少しく</p> <p>洋銀 綠色を斑らに帯べるもの 直径五六分</p> <p>ヲサンブタ 支那ヨリ来リシモノナリト</p> <p>長 9寸 5分 巾 8分</p>	<p>(下段)</p> <p>火の事 — 熊ヲ飼ヒタル家ノ外 外ニ出スコト自由ナリ 火ヲ絶ヤサズ様心配スルコトナシ 大便ノ時間なるもの 一何物テモ用ユルコトナシ</p> <p>人間ノ本源</p> <p>結婚 — 年令、法、一相五ニ愛ニ合フ仲ナレハ自由ニスルモ父母ハ闘争セズ、然シ父 母ノ方ニ氣ニ入ラスモノナレハ不承諾ノコトアリ 一家ニ夫婦</p> <p>者ハ何組モ同居スル</p> <p>乳の出でざる時 — 他ノ女ニ子ヲ頼ム 或ハ砂糖</p> <p>臨終の時</p> <p>漁法ノ種類、——あみ、もり (鉤金ニテ製シタル鉤ニテ小サキウグイ類ヲ捕フルコトモアリ) かぎ やり、ヤサ</p> <p>猟法ノ種類、 鉄砲、わな、虎ばさみ、置き弓、やり (昔ハ■狩ニ用ヒタリ) わなニ用フル線ハ さねづみ、ねづみ、やまどりナリ</p> <p>入墨 ——昔ハ手ニモ入レタリ</p> <p>髪を切る法 ——かみそり (今ハ) はさみ (今)</p> <p>アフト ラン 雨ハ降ル</p> <p>他人ノ難破松ニテ死セシコトヲ聞キシモ哭泣ス、一般ニハ死後墓ニ来ラ旨スル コトヲ忌ム (殊ニ女ハ) ト雖モ —— [右上へ]</p> <p>墓ニ至リテ煙草ノ少量ヲ</p> <p>ツマミテ供スレハ死人ハ大ニ喜ブモノトナス</p> <p>東海岸ニテハ又ノアル墓標ヲ用ヒズ</p> <p>一般ニ女ニハ墓標ナシ 一般ノ人々ハ海ニテ死セシム</p> <p>ヲ恐ルハコト甚タシク 其ノ語ヲ聞クタケニ大ニ泣キカナシム</p>

<p>(下段)</p> <p>式様トシテ居ル</p> <p>シラハカに入る</p> <p>一本ハナシ ネルクム シ フ</p> <p>トナ (一般ノ名) フフク 連ふ■長クナレハ金■</p> <p>キテ (モリ) ドララ (ヒモノ) ドナ (橋) トナルクム (二本ノ時) トルクム (二本ノ時)</p> <p>アザラシヲ捕フル (氷ノ上ニテ) 時</p> <p>ラッハ 一丈モアル (何テモツク) 水面ニテ</p> <p>三寸 二尺 四寸位入 ニヶ処ニテ結ブ</p> <p>一寸</p>	<p>野帳 1.21 (上段)</p> <p>熊ヲ捕ヘ家ニ歸リテモ婦女子ハ 哭泣ス (カモイハ来タト云フテ)</p> <p>又タ熊祭ヲスルタメ殺サルハ熊ノ前ニ至リテ 充分ニ哭泣シテ別レテ告グルモノナリ 他人ノ死セシ報告ハ来レハ婦女子ハ 先ツ泣テカナシムヲ 一ノ儀</p>
--	--

野帳 1.25
(上段)

頭ヨリ ■ヲ通シテカブセ、
小サキ布ノ中ニテ足ヲ
巻キ包シ其上ニ足袋
ヲカブセセル、再ヒシヨールニ包ミ伏セシム
取り出し

微温湯ニテ体ノ下部
及ビ頭ナドヲ洗ヒ
然ル後母ハ其ノ湯
ヲロニ含ミテ子
ニロヲ近ツケ、吐キ
出シツ、右手ニテ全身
ヲ摩シ 洗ヒ漚メ
再三繰リ返ス
全ク終レハ シヨールノ
如キニテ極メテ粗雑
ニ体ヲヌグヒ且ツ包ミテ一暫ク頭ナドヲヌグヒ 不潔ナルシヤツヲ
コタンケン岬ヨリ
嬰兒

野帳 1.26
(下段)

シスカカに入らんすとす、

野帳 1.27

オロココモニナレル
襦袢ノ物入シ
コクト (■) 山ガツタ (■)
ハト (■) 水
ホリア (ハ) ナ フラツタンダツタニ (■) 摩毛
エハ (■) 魚
ナリ (■) 魚 アダツタ (ト) ドルボツニ (■) 豆
ウインダ (犬) ニルクト (カ) シ ベイ (■) 月
アトチヤ (親) バア (■) 陰 (■) シエ (■) 日
マ、(妻) 女 ツクツク (■) 陰 (■) ナ (■) 地
ウツト (女)
シイ (恋) ツエウ (■) 子 (■) 天
ダイ (恋) シヨソ (■)
ジャツカ (宝) アム (■) シヤインナ (■) 天
グワヨ (■) 軸 ホシタ (■) モーモ (■) 天
キヨウ (■) カ (■) ホトリ (■) 権 (■) キセシ
キョウトクリ (■) ガ (■) ラ (■) 之 (■) テトウ (■) 土 畫
ウタ (■) 魚 バンナコレ (■) 彦 モゴ (■) ア (■) 柳
ガイノイトエ (■) レ (■) 之 (■) シエ (■) 毛 (■) ワンバツク (■) 毛 彦
テクト (■) 彦 (■) 権 (■) タ (■) シエ (■) ウタ (■) 靴

野帳 1.23
(上段)

薄岸ノイナラ
家ヨリ 三ツ 離レタル処
フンカ ーシラ、カのちやく
フレチシに至る
途にて
フレチシに
入らんすとす

本漁ノ名鼻所、 二尺八分
或は険しき所、
漁されし處に立つ

(下段)

野帳 1.24
(上段) ヨタツナ ニートイ
ニートイ 渡船場
コタンケン浜

(下段)

コタンケンヨリ春移住セリ
ヘガチイオ
トイタ村アイヌ (ヌッコンバイ)

煙草人、火打石入、
マキリ 角アサゲル
細管ノ両端ニ此ノモノヲ
ツケ前二重
■ル

生にて食するは鱈ノ頭 (ヒジキ)
ト尾より二三寸の処のみを食す。
又たイトウ (ちゆらい) をも生
にて食す。
米をかみてこね団子となし
焼きて食す
鱈の焼乾をかみ其をアザラン
の油にて料理する
野菜を好まず ふきを
食はず 唯たバツカエの時に
アザランの油にて
食す。

幼 児
病 ヌ
ル 時

黒 赤

一本
一尺三四寸ノ
ヲシコニ
といふ木
(柳ノ木ノ
如キモノ)

鉄 glass
ゴブサ ねり玉
red B R 青、白、桃
yell. R B red
green blue(g)

一尺位
玉 鈴
黒キレ

■カエキ

野帳 1.29

(上段)

マングンコタン以北ニアイスハ二百、オロッコハ350 ギリヤクハ150 トングースハ国境
(キーリン)

ノ三里南ムイカに三人 タランコタンニサンダー (露) 親子
秋ニハ山ニ入り テルヲ捕ル冬ニハ川馴鹿ヲ食スルタメ山ニ入ル 三ヶ
四ヶツハ 天幕使ヒヨスル 若キ人ハ 常ニ働ク セムシハナイ
以上モ居ル 之レ肉食ノタメナリ 病ニカハレバ急ニ死ス 春ニナ
レバ テルニニ岬ヲ越ヘテ フナコシ ヲ越ヘテアサザシヲ
捕フル 夏ニナレハ川ノ上流ヤ河口ニテ漁スル 中ニハ内地人ニ雇ハレ
トナカイヲ ■フ 其数ハ畜ノ度ヲ示ス 故ニ妻ヲ娶ルニモ
トナカイノ数ニヨル 即チ 女ノ売買ナリ 又タ祖先伝来ノ
刀、劍、ニシキヲ宝トシテ居ル 血族結婚ヲハ決シテナサズ
之レ神ノ罰ヲウケルカラト信ジテ居ル オロ、トギリ、トノ間ニハ昔ハ
出来ザリシモ今ハアル 妻ノ意ニサカラウコトナシ 之レ買ヒタル
モノナレハナリ 妻ノ財産ト夫ノ財ト分レテ居ル

(下段)

鼠ノ皮、カワウソノ皮ノ如キ妻ノ財産、テン、トナカイノ皮ハ
夫ノ財、

ニコラエスクノ北ニハヨコト云フ人種アリ 冬ナレハ 三日ニテ国
境ニ達シ今ハ六日ニテ丸オ松ニテ行カレル 故ニ土人ノ捕ヘタル
皮ヲ 買フタメ 露人ハ南下スル 一年間に八万匹モトレルト
スシカ (シスカ) 附近ニテ日本人ノ買ヒタルハ二万五千匹モアル 他ハ
露人ニ買ハレタ 土人ハ皆チ露領ニ行キテ買フテ来ル 毎モ
1/3 ニテ出来ル 故ニ此処ノ土人ハ日本人ヨリ買フヨリモ露人ヨリ
買フ傾キアリ 之レ 日本物品ハ粗雑ナルタメナリ
露人ハハマグンコタンニ 16 スハカニ露人ヲ妻ニシテ居ルアリ

野帳 1.30

(上段)

露人ハ ■■■ が河ヲ逆行を試みたれど九月頃なる故失敗せり
然しノービックの水兵ハ土人ノ船にて種々の困難を経て上
れり
三四百貫ノ荷と四五人の人夫とにて水を ■る事は出来る
ナヨロより三十六里にて国境に至る

ハウラッコ (手拭)

フナーフト (指編)

トッポ (ボタン)

ウムリ (鹿)

バリウ (ヌボシ)

カカラ (釜)

ララケガール (酒下サイ)

ギキナバ、ガール (煙草下サイ)

ドルウ (ホ) (鹿)

フエトガ (マキ)

ネルンキー (ニシ)

ハゼ (小ニシ)

ウニエーエ (ウゴ)

ダウ (鱈)

ウール (鱈)

ブダダフリ (ヌシ)

ウーガリ (鹿)

プウツト (小虎 ■■)

ウアムトア (樽フシ)

プトウリツカ (トクリ)

チャーミ (茶碗)

ビニエシ (皿)

ウラルムカ (盆)

エスピルト (アルコール)

ホツアリ (罎)

ラウラタ (刀)

シイ (鹿)

カルツカ (ユ)

ベラート (■)

シヨクシヨ (ト)

ダシ (ア)

■バシツタ (アゴ)

シエジエクタ (ヘ)

ガイイ (鹿)

ハピナウ (鹿)

ナルマクタ (鹿)

トキーモエ (刀)

エーウ (へ)

イエンヌーウ (鍋)

ウツボツタペー (鹿)

ウアキーウア (クラ)

ウエチエンシエレー (■)

シユナー (天ノ口輪)

ウベルタニカ (銃)

パト (煙草)

チャーニカ (釜)

ヌストーニ (■)

カウララーバ (杖)

モーツユ (モエ木)

モー (木)

タウ (火)

二箇半

家屋

(下段)

ボシチヨイ (ノ)

チエツカ (シラ)

ロトア (チンキ)

シエトホ (トレス)

ナモツタ (舌)

モロツチヨ (人物)

ハラタ (一番)

シヨウラ (ニシ)

フルバト (女服)

蚊にてトナカイは襲はる、トナカイは冬期人間ノ尿を好む (糞分を含むためならん) 犬ハ糞を好む 犬嚙ハ一月ヨリ三月マデトブキーまで三日にて通る 以北はトナカイの櫛にて旅行する、一月より三月までは晴天のみなる故トナカイにて旅するに好期なり 故に土人は移住する一ケの櫛に積む丈ケの財産より多く存せず 眠るにもトナカイの皮を敷き 寒さに堪へる

(下段)
カウウ テンを捕ふるに馬の尾のわなにて水にヲボレシヌ翌朝捕へる、区賦は定まり 他の場所にて捕ふる能はず

づるくして
利コ一なるはオロチョヨンより ギリヤクは三ケ国の言を事る
オロチョンはニケ国 (アイヌ、ヲロ) 最も利コ一
ギリハ 昔の風を棄てず lait,
トナカイは放牧にて番人もある アイヌは脂の為め乾期に堪ゆ
雪は五尺 北に行けばは少なし 土人は脂の為め乾期に堪ゆるのみ 生脂にて
脂の粥を食す 五月雪解けの時は交通最も悪し
雨期ハ八月の中より九月の末まで

野帳 1_31
(上段)
七十位ハ最高年令 一般二年令ニ比シテハ老衰、 ■女ハ二十ニシテ結婚す
男は年多く財産を貯へるまで
一夫多妻なるが 日常の生活上老妻は眼病を患ひ仕事も出来るさざる様になる
故 若キ妻を娶る事を夫に勤 (勤) めるほどよい 若キ妻は母に事ふる
如く老妻に事へる 決して そねむ如き事なし
財産は長子に伝はる
数の觀念なき故 分配する際には 其の数の多少に関せず最も初めに得る事を以て最上のものと心得て居る
日本人の■は如何なる事にも其意に従ふさま 実をあげははへし
顔を洗ふには湯を口にくみ両手を廣げ其を吐きつゝ
行ふ

チェンポー (0) トージュス (6)
メイープ (6) トゥンエー (0)
ワゴス (6)
ウルンド (0)

(下段)
○ G ツェグース (青紫花)
● ト エスクトゥ (イソツハジ) G?
● フ ウグーフ (カンコーラン)
● ラ ガノワハ (地衣)
ドフガsチフ (6) ハワガチフ 八九寸 ゴsヨー (6)
0 (ドリエフクトウ) (タルダボケトウ) メジエグス (6) 上ホ (6)

一 間位
一尺二寸
一尺七八寸
ハワガチフ 八九寸
カハノ長サ 九尺
ゴsヨー (6)
メジエグス (6) 上ホ (6)

五 寸 四分
柴
馴鹿ソリ
一尺六寸
ギョウク (キエーグス)
シヨウリ (トモカチ) (マイニエ)
タネヘス (6)
フレイ (0)
キケヌヘイ (6)

ハマルブクトウ (0) パストレ (0) シヨウリ (トモカチ) (マイニエ)
アカルガチエフ (6) タネヘス (6)
ワクソゴ (ソリ) フレイ (0)
キケヌヘイ (6)
ムモツクダ (0)
ムモワクス (6)
上部ノ板

野帳 1_32
(上段)
ギリヤク種族、埋葬法 人死スレハ其ノ身ニヨリ相違アリト雖モ先ツ相応の衣服を着セ 且 ツ裝飾品ヲ帯ベセ且 ツイナヲ帽子ニツケタルヲ冠ラセ火葬ニス、此法ハ薪ヲノ如ク高ク積ミ此上ニ人ヲ臥セシメ其ノ四方ノ角ヨリ点火スル点火シ終レハ其周囲ニ哭泣シ居タル群集ハ尽ク立去リ僅カニ一人其ノ死者ノ子或ハ近親ノモノノミ残り尽ク焼ケ終ルマテ此処ヲ去ルコトナシ而テ即チ此ノ焼ケタル骨ハ普通見ル如ク拾ヒ集メラルハコトナク其ノマ、此ノ場所ニ捨テラルハモノナリ 家ニテハ木ニテ高サ七八寸ノ人形ヲ作り之ニ新ニ仕立テタル小ナル美ハシキ衣ヲ着セ且 ツ身分ヨキ処ナレバ 錦ニテ帽子ヲ作りテ其ヲ冠ラセ 加フルニ

<p>野帳 1.41 (上段)</p> <p>(木田氏より聞きたる話)</p> <p>アイヌは自分の仕事なれば如何なる事をも意とせされど他人に雇はるれば1/3もなさず仲々狡猾なり タライカは女 ■■■足なる故妻を娶るにはナヨロに至る妻を娶らんとせば二年位も其の親の家に至り手伝をなし然る後■■■に連れて来る</p> <p>若き婦人ノ一人居ル処 に遊■■■に行くも一言も ■■■せず</p> <p>ニシヨス 盆 木田漁場ニテ</p> <p>セトノ飲ミ (蠶ニテ) 飲ムコト 女子の言葉を以て上等の 言葉として居る</p> <p>独立して漁業を始めんと運動し居るものあれど 一度漁を充分にすれば 其にて満足し■■■年分の貯をなすべき考を■■■さず 鍋をかけて後薪を取るに■■■るといふ有様なり 家をば未子に譲るはアイヌの例なり 知らざる他人にてても若し 訪ぬるものあれば快く迎へ馳走をするは感すべし</p>	<p>(下段)</p> <p>樺太のあつたは樹皮ならず アエソといものより取れる絲なり 他の場所を見た事なき故自分の居る処を以て極楽と考へて居る故に■■■ に観光なし内地に行く事を好まず、アイヌは他の土人と異り 酒食をねだる如き事をせず 食は一般に少なし七分通り は菜にて腹を■■■たして居る 一食に 片身二本位 ヒマリ、シジャモ (狐の如き日本人) 一村にて三四人も病人は出来る時には他に他に移る ニ申す</p>
<p>野帳 1.42 (上段)</p> <p>タライカ湖ヲ望ム</p>	

<p>木もなく墳もなく唯だ等しく高まり居るに過ぎず、 十字架 を初めより建てざるものもあり</p> <p>ギリヤクにてもオロツコでも 主人死する時は口必す幾匹かの犬は墓側 にて打つ殺され 其ま、風雨にさらさるゝ故 暫くの間は臭気 鼻をうつものなり 又た由遠方にて死する時は 其の遺物を運搬す る事能ははざる故 唯だ 小きき屋形を作り其をもの内に宝物 を入れて普通のものゝ如くするなり 葬式の時には其の墓 の傍に火をもやし むしろを敷き種々の馳走をもて村人 に分つ習慣なる故 新しき墓には米、麦粉、瓶、空きかん ■■■等の其散在するを見る</p>	<p>野帳 1.40 (上段)</p> <p>ギリヤクは熊を捕へたる時は一定の処に樹枝にて小舎様のものを 造り其処に樹皮製の入物に食物を入れて供ふ 又た其の 傍には木にて 丸太小屋 (熊を飾る如きものなれど小にして ■■■なり) を作り其内に骨を納め 其上に木を積み重ね 又た其処の木に立てかけ居るものは太く大なる柱の 一端に熊の頭状に刻めるものなり ギリヤクは多く外にて 料理をなし且つ外にて馳走を する オロツコは 家の内にて 行ふ 故にギリヤクのなしたる跡 には 火をもやしたる残物あり且つ 瓶などもあり</p> <p>(タランコタン)のギリヤク村にて)</p> <p>(下段)</p> <p>水中にて死セル子供ヲ両足ヲ洗ヒテ倒ニツルシ外 (内ニ入ルハヲ好マズ) ニ置ク 焼カズ コケノミヲ葉ニシテ 焼酒 サンピンナドヲ飲ミ 二三十人集リ 親 婦女子ハ泣ク ■メタルニテ 船ヲ破リ カケテ置く のんどの病む 時 ナ 頸に巻く ヲ ギリヤク 海岸の左方にあたる 原野に堅穴あり タランコタン 河岸にて オロツコ墓 四尺</p>
--	--

<p>(下段)</p> <p>カスボ山口地ニハ蛇ハ居ラズ トカガハ アイヌ、オロツコ、ニクブン、キューリン、ヨツコ、サンダシ、 (トンダグース)</p> <p>■ムガ衣食住ハ服モ清潔 家産ノ大部ハ長子に少しは次のものに</p>	<p>カスボ山口地ニハ蛇ハ居ラズ トカガハ アイヌ、オロツコ、ニクブン、キューリン、ヨツコ、サンダシ、 (トンダグース)</p> <p>■ムガ衣食住ハ服モ清潔 家産ノ大部ハ長子に少しは次のものに</p>
<p>(上段)</p> <p>カスボ山口地ニハ蛇ハ居ラズ トカガハ アイヌ、オロツコ、ニクブン、キューリン、ヨツコ、サンダシ、 (トンダグース)</p>	<p>カスボ山口地ニハ蛇ハ居ラズ トカガハ アイヌ、オロツコ、ニクブン、キューリン、ヨツコ、サンダシ、 (トンダグース)</p>

<p>クアング (大陽)</p> <p>三寸 ロング 二寸 之ヲ 破ルト 同シ</p> <p>苦ハナシ 月二女ノ形ハ 見ユル故</p> <p>ラシカシク一寸八分</p> <p>上二下ガ置ク 悪魔</p> <p>ノ所存 安眠不能ノ時</p>	<p>クアング (大陽)</p> <p>三寸 ロング 二寸 之ヲ 破ルト 同シ</p> <p>苦ハナシ 月二女ノ形ハ 見ユル故</p> <p>ラシカシク一寸八分</p> <p>上二下ガ置ク 悪魔</p> <p>ノ所存 安眠不能ノ時</p>
<p>野帳 1.46 (上段)</p> <p>八分</p> <p>四分</p> <p>五分</p> <p>シヤツカレの ラムケツキヨと云ふ蛇の作りしもの にして祈禱の時持つ 来る。</p> <p>オロツコ 頭痛ノ時 〔一部、翻刻せず〕</p> <p>(下段)</p> <p>〔一部、翻刻せず〕</p>	<p>野帳 1.46 (上段)</p> <p>八分</p> <p>四分</p> <p>五分</p> <p>シヤツカレの ラムケツキヨと云ふ蛇の作りしもの にして祈禱の時持つ 来る。</p> <p>オロツコ 頭痛ノ時 〔一部、翻刻せず〕</p> <p>(下段)</p> <p>〔一部、翻刻せず〕</p>

<p>加減 あはれはへきものなり 又た 片手にて子を背に負ひ片手に物品を携ふことあり 普通前に抱くには 日本人の行ふ法と同一なり 女子等は河中にありて 遊泳にたくみなり 女の体には フクタ毛の如きは あれど 長からず トナイチヤのアイヌ一般に日本化し 他のものより一歩進み居るの外見を有す 女子の倉庫に入入るため梯子を上下する様實に巧みなり 女は年令に關はず立小便をなす 顔を洗ふには 手拭に水をふくませ一度顔をふき 然る後 かくろく しぼ</p> <p>(下段) りて ふき 同法にて髪を湿〔?〕ふして櫛る。 さみせんの頭を出して外て歩めば風は吹く 石と石とを打つ合はすときは波は出る</p>	<p>野帳 1_49 ペンノウリ 箸シヤポー 茶チヤエ (ニッス) (G) (チヤフカ)</p> <p>カワウソフ 黒モノ 針ケターア (ノッホ) ホーラ (ノゴルホントク) 仕立袋</p> <p>クチユウ 皿 皿 シエナツクタ (■) (ガ s ウスケー) ホナツト (キウルー) ■■■ 小刀 (ジヨッコー) 鉄 (ハサン) トナカイの毛</p> <p>ダーレ コープト フキサラ (■) 太鼓 鉢巻</p> <p>ヤオドブ 中ニゆりノ実ヲ入レガザク音ヲサスル ばづ ニケ キシヨボ 持ツテ舞ふもの</p> <p>皮、アカネ色、シマ、白、黒、ソメ、トナカイ、八寸五分、二寸三分、二分</p>
--	--

<p>野帳 1_47 (上段) ノ背ニ施ス凡テノ斑紋ハ千篇一律ナ不自然ナ唐草模樣テアルガ其ノ型ハ 礎ニ太古式ヲ興床シイ 文字 絵画ナシ サレト原野ニテ熊ヲ獵 セシ時ハ傍ノ樹木ニ此ノ斑紋ヲ刻ミ置テ深山大沢ヲ跋渉セル時ハ 休息ノ処ニ又タ此模樣ヲ彫刻スルト後ノアイヌノ旅行者ハ其ヲ見テ 誰レカ何ヲシタカヲ知ル 之レ真ノ結繩ノ文字トモ云フモノナラン 腰刀ノ鞘ニ施シタ 西蔵仏画ノ如キ彫刻 前掛脚絆ニ於ケル龍宮 殿式ノ縫式ノ縫箱ニハ美ニ精巧ヲ極メタルアリ 腰刀ノ鞘ニ施コシ ニモ五六ヶ月モカハルト 北海道ノ東北方ノ婦女ハ此ノ刺子ノ 筋ニ長ケテ居ルノハ永〔ママ〕ノ冬期戸刃ニ驅逐シテ所詮ナサノ糸リニ習練〔?〕 シタ工藝ダト思フ 家ヲ造ルニ当テガツテハ切リテハ当テガツ 日本ノ大工ハ予メ切リ組ミ置クヲ見テ不思議〔ママ〕ト驚歎スル 左右同一型ニ ■ヲシタ造船ノ筋ニ■リ到底及バズト彼等及ヒ露人ハ不思議〔ママ〕ニ思フテ 居ル</p> <p>(一部、翻刻せず)</p> <p>(下段) (一部、翻刻せず)</p> <p>脈カ■ク体カモアルガ押スト引ク即チ真向正面ノカデ横ニ耐ユル 力ガ更ニ無イ 天性ノ健脚ニシテ一回二十里ノ行程ナラハ幾日ニテモ靴 ユル其歩ムヤ■シト■風ノ如キモノデ一步毎ニ足ノ関節ハ屈曲スルニアラズシテ膝 ノ如クニ爪先ニテ歩ム 故ニ 其ノ足跡ヲ見テ分ル 而メ彼等ハ 常ニ脂ヲ食スル 故 呼吸切レノセスノデアル</p> <p>(一部、翻刻せず)</p>	<p>野帳 1_48 (上段) アイヌ婦人の子を取扱ふ法、一 つ 左のわきをゆるくなし わきの下より子供を横に出して乳房をふくませ 手にて子供を抱き右手には桶の如きを さげ 其後ろには 皿を持ったる子供や長き煙管 (円のもの) と煙草入とを持ったる 子供の従ふさま實に奇観といふべきか 又た 其のだらしなき</p>
--	--

<p>(下段)</p> <p>ヲ入カサキ言ラスル カモノ頭</p> <p>(ゴイガシ) トウングドウ 柳木</p> <p>アーラへ</p> <p>色布 一本ハ</p> <p>黒 赤 白 黒 キレ 本 六</p> <p>トウニ 着物 上着 緋入モアリ</p> <p>一尺五寸五分 Red Green Green Blue 紫 黄 Green</p> <p>ボウニトウ (ノントナオ)</p> <p>バスバルントウ (G)</p> <p>アツゼ 雷 雷光</p> <p>二本 持ッテ まうもの</p> <p>一尺九寸</p> <p>(ヤングsバング) ヤックバ 背ノ帯</p> <p>ガザク</p> <p>鱒</p> <p>トウク (日干シ) ボクパー (焼キムシ) (オソムム)</p> <p>6</p>	<p>野帳 1.50 (上段)</p> <p>オロツコは昔よりアイヌと同ジク本島ニ <絵> アルモ無キモ同ジ (前かみ) 居りたるものにて何処より来リシカを知らず</p> <p>ウ井ツスタト云フハオロツコノ自称 アイヌハオロツコト云フ 露人 orochon ト云フ</p> <p>フウジユ 骨ヲ何レモ煮スシテ刀ニテ肉ヲトルオロツコハ称シテ <u>ギョエルダ</u>ト云フ 男 内ニテ或ハ外ニテ鍋ニテ ヲモ煮ルカ 何処ニテ煮ルカ骨ヲ折ルカ <u>ギリ</u> <u>オロ</u> <u>ヲ</u> <u>オスグ</u> <u>紐</u>ト云フ</p> <p>ウークタウ (女) 熊ヲ殺シタル時 野ニテ腹ヲサキ内臓物ヲ捨テ 皮ヲムキテ家ニ持来リ 煮タル後骨ノ中 頭骨ト骨 [?] 骨トヲ モトノマノノ形ニ棒ニサシテ ツナギ 樹ニ結ビツク近クニ立テル 四指 [?] 骨ヲハ ニ入ル (御馳走ノ後) 肉、舌ヲ食ス 膳の一ヲバ昔時捨テシモ今ハ日本人ニ へ売ル (酒ア■■■■スル様ニナツタ、争アルヲ恐れ)</p>
---	---

<p>彫刻ある 持ち方ハ日本人ト同一ナリ 今ハ普通ノぬり箸及ビ spoon ヲ用フ</p> <p>(下段)</p> <p>箸ヲ昔ヨリ用フ</p> <p>馴鹿ノ角ハ冬期 (春早ク) 何レモ落チテ (山中ニ) 新ニ出ル 老ヒタルモノハ角ハ六キク幼ノモノハ 小ナリ 主ムハ土人ハ角ヲ用ヒズ 悪シキ順 [ママ] 鹿ニテモ二十五円位</p> <p>河ヲ泳グ故山ニ入ル時ニハ泳ガセル</p> <p>耳ニ小刀ニテ所有ノ印ヲ附ス 乳ヲ人ハ飲ム 甚タ甘シト</p> <p>小供ニハ米ヲツブシ布片ニ包ミ シヤブラスル (乳ナキ時ナドニ) 母ノ死後ハ砂糖ト milk ノミニテ養フ</p> <p>石器ヲ知ラズ</p> <p>〃石器 [?] ヲ用ヒタリト</p> <p>キーリンノ 話ニ 国境ニ近ク居ルモノニテ オロツコト同ジク tail ナシト</p> <p>満州ニ居リテバケ物 (鹿ノ皮ニテ身ヲ掩ヒシモノニテ人ノ形)</p> <p>トイチシノ話ハオロツコニハナシ 石器ヲ見テ甚ダ奇異ナル面貌ヲナシ 貴頭セリ</p> <p>ニグブンニテハ穴居家ヲトニタート云フ 石器ヲ見テ甚ダ奇異ナル面貌ヲナシ 貴頭セリ (ホトクチ) ナルアイヌハヨク知ル ばげものノ用ヒシモノナラント云フ 売らざるやと余に問ひし程なり</p> <p>タライカ及ビナヨロ近辺ニトイチセラ作りタリ 木及ヒ草、砂ニテ掩フ (アイヌ ワレラン)</p> <p>中央ニ火ヲタカズ 砂ニテ かまどノ如キヲ作りテ窓ノ一方ニ置キ之ニ 火ヲタ ク ニグブンノ穴居ハ アイヌノモノヨリモ大ナリト シスカノ上流 ゴードニアリ</p>	<p>野帳 1.51 (上段)</p> <p>草ヲカケ <u>ボニコ</u>ニ聞ケハ分ル (ニグブン)</p> <p>砂ニテ掩フ <u>ハツグド</u>ト云フ 病氣ノ時 皮ハ山脚鹿ノ皮 オロツコハ穴居ヲ呼ブニ 占フ時ハ三四日 カハル 生キレハ 金ヲ物ヲ沢山送ル フチニ groove [?] ヲ 偶像 [?] ヲ作ル 物金 作りテ張ル アリ シヤーマノ占ヲスル時アリ 又タ鹿ヲ殺シテ神ニ捧 グル時アリ ボウニトウ ニテ皮膚ヲ コスレバ 其レ病人ヨリ何物カハ ハゲテ 附着スルコト 恰モ魚鱗ノ取レ去ルト同シナリ</p>
---	--

野帳 1.52 (上部)	アマツボ 竹製(袋丈) 七月 十八日 北海道土人(樺太)のものにして ギリヤークは、しづこ(袋丈)一樽を亨く てこれを五種と氏へたるものなり と、ギリヤーク曰く、此ギリヤークの 知らざるものにして、其の毒は恐ろしき故用ざる意 もなしと、只だ、アイヌの毒の毒の恐ろしきを聞き ■しよの余り交換せざるものなり、此の毒によつて 御■なな(熊)を立地に懸ると、アイヌの物毒を聞き いたく驚き居るを、味なり	黒 桃	露領 ノニグレン 外見同ナレト 露人古 家ニ居ル数少シ 露人恐レト甚 シ 穴居ノモノモアリシヤト 漸絶滅 セリ 沿海州ノギリヤークハ 露風 ノ丸太(袋丈)建ストト用ト居ル 露語ニ通ス ギリリン(トング)ノ 國境ニ近ク住シ外見オロンコ ト異ルトコロナシト 雖モ其ク高クシテ立派アリ (十九日)	黒 白	一箇を糸にて付付 ノ 前部 ボテメの 盤 所有	衣ノ 左袖 赤 黒 青、黒	一尺二寸	ギリヤ	糸 トナカイ毛	黒地 玉ヲ並べ	六寸 一尺五寸 八寸五分 二間	荷物用(被ニシテ之ヲノセタル後)ひも ニテ(樽)ヲ占ム 荷籠ヲ入 二本ヲ並べ合旨ニシケル	ひもニテ両方ニ下グル 其上ニ敷皮ヲカケル↓
-----------------	--	--------	--	--------	----------------------------------	------------------------	------	-----	------------	------------	--------------------------	--	-----------------------

難 [?] 船ノ時 Shaman ハ其人ノ生死 ヲ予言ス ■ニ昨冬土人ハ風ニ 流サレ三日モタバヨモシ間 家ニ居ル 妻ナドハ 泣キサガビ Shama ニ頼ミ占ヲセシニ Shaman 曰ク決 シテ死セズト 果シテ 陸ニ揚ゲラレタリト	ボシメ (五十才位) ノオロツコノ妻 マーレア (同年位) ハ Shaman	(下段) シャーマニハ男モアリ女モアリ 舞踊ハ甚ダ奇ナリ太鼓ヲ打ツ腰ヲ異様ニフリ顔 ヲシカメ或ハ上ヲニラメ下ヲ見 或ハ舌ヲ出シ 眼球ヲ白クシ 種々ノ容貌 [?] ヲナスモ少シモ笑フコトナシ 其ノ真面目 [真面目] ナル様 傍觀人ヲシテ笑ヲ感ヘ得ザラシム 腰ヲフルニ今ハ [?] 仲々六ヶ敷ク見ヘ其ノ調子ニ合ハセテ 太鼓ヲ打ツ 種々ノ舞ヒ様アリ 歌フ	帆木綿糸或ハ皮 pole ニ近ク皮 ヲ用フルハ普通ナリ 二、五本	大繩ヲ用フルヤ 用フ トナカイノ糞■ノマヲ引ク 土人ノ数 ギリニ tail ナキアルヤ 有リ キーリンは昔より居るや、河を下らぬや 以前露人居ル 時來リシモ今	後ニ 母 徑ニ間位 ス 百 ハ ニ 位	や な ま さ か り モ ル チ ヲ ク 命名	焼キテ食ス 立樹及ヒ流依ボヲ用フ
---	--	---	---	---	---------------------------	---	---------------------

男子結髪ノ時ハ女ハ鉄瓶ヨリホヲロニ入レ
其ヲ頭ニ少シツハ吐キテシメス 然ル後櫛シテ
ケツリテ虫ヲトリ後結ブ 其間男ハ
ウタハネシテ居ル 凡ノ顔ヲ洗フ時ニモ
一度口ニ水ヲ入レ 手ニハキテナデル
女ハ耳ニ敷ケノ孔ヲ有スルアリ 故ニ大ナリ
針ヲ通シ糸ヲツケテ置ケハ孔ハ大キクナル

野帳_155
(上段)
ロカ (二十六七) の彫■し馴鹿 (かばノ皮ニテ)

神ヲ有ス人ト有セザル人トアリ
土人ニ向ヒ目ニ見ヘザル神様アルヤト 問ヒシニ
チヨーカーイ ハ 見ヘナイ神ハ知ラナイヨト答ヘタ
露人ハ 強制的ニオロッコヲ■教(キリスト教?)ノ
信者トナセシト
雖モ今ハ此ノ如キ有様、idol 及ビ シヤマノ
カハヤハリ彼等ニハガリアアル信仰物タリ

煙 火トイハル (11+10)
ドウダウ 火
ピンノウク トウダ
チヤキ
ホウリエ セル
ダリ 熊皮ニテノ幕
玩具 ヤブトウホウイ cradle ニ ツケル 卵形(木)
人形 ライカン 二カニシテ出立置キトナ
音スル 耳ニ孔ヲアケルニハ幼
時ニ針ニテスル
泣カズト云フ
煙草入 煙草入
シヤツノ縫ヒ模様

野帳_156
(上段)
ギリヤークの自稱 地名 大ノ形ヲ作ルコト
体温 脈 呼吸数 排泄、 嗅 家ニ居ル時ニハ女ハ脚ヲ
がまノ織物ニテかばんヲ作り居ルモアリ 寒キニモ係ハラズ幼見ハむしろノ
他人ノモノニハ 決シテ手ヲ付セズ 上ヲシヤチ [シヤツ] 一枚ヲ着テ面ニ居ル
ピロードノ 衣ノ背ニつばヤ玉を連ネタルヲ付セルアリ 刀ヲトグニハ刀ノむねニテ藤スル
幼時ニハ耳ニ銀貫ヲサゲシアリ 下方ノ■ニヲ■ム■王■
鱧ノ尾ニ近キ部ヲハ生ニテ塩ニツケ食ス 女ニテモ内輪ニ■ムモノナシ■ケハ体ノ上部ヲ動かサズ
モアリ

血 音 ノノくト家内ニ入り来リ勝手ニ坐ヲ■■ノ姿勢
レノ ニテ座スルアリ 横ハアリ 鞘ヲシテ茶ヲ出シ着ヲ出セ
縁 ハ食シ又タ出テ行ク 子供ハカバヤノ如キ草ノ葉ヲロニコクワヘ、 バタクト
音サシテ葉シム 小指ニテ動かス

(下段)
ニグブン 自稱ナリ 其ヲアイヌハニグブント云フ 露人ハギリヤークト云フ
子供等 遊ビニ角カモアリ 又タ草原ニテ角カノ真似、小高キ処ヨリ飛ヒ下リ来リネコロブ
アリ 子供ヲシカル 頭ヲタハク 煙管ヲロニコクワヘ幼見ヲワキノ下ニシ靴ヲ作ル膝ヲクツシ
ギリヤーク ハ外ヘ天幕住居ニ変シテモ 中央ニ四角形ノ炬形ヲ作ル
器物ヲハ洗フコトナク 種々ノ布片ニテフクノミ 腹ハ空キルコトナシ
■ナル魚ニテモ アザラシノ 油ヲツケテ食スレハ甘ク且ツ 腹ハ空キルコトナシ
大ナルアザラシニ正アレハババな樽一ケニ一杯出来ル
肉ト皮トノ間ニ厚クナリ居ル 取りタルマハヲ樽ニ入レテ置ケハ油ハ上ニ浮ブ
一人デモ多ク捕フル人ハ百モ取ル 鉄砲及ビ鎗 ノ上手ナ人ハ主トシテ捕フル皆ナ
捕フルモノナラズ 分ケル 氷ノ上ニ座リ居ル処ヲ鉄砲及ビ鎗ニテ捕フ
乾シタ鱧ヲ三片位ヲ焼キ、油ヲツケテ食シ茶ヲノム
油ハ飯ニ入レテモ食ス 冬期 油ヲ食ハサレハ身体ハ悪クナル

<p>野帳 1.59 (上段)</p> <p>常用ノ船 欽テ破リ 頭ノ方ニ入ル、ガ茶釜カマヲ破リテ 野ニ捨アル 女ノ用ヒタル、 十字架ヲハ足部ニタツル マサカリ 長子 (十才バカリノモノ) ハ少シク土ヲカケル 肉ヲハ墓場ニテ煮テ食フハ■ナレハ当日ハ時違キ故之ヲ陸セル 日本人ニノミ分テリ、盛土ノ土ニ十字形ヲカク 墓ヨリ北方川ニ面セル方ノ両側ニ柳ノ小枝二本ツハ、(下ノ方ヲ皮ヲ ムキ イナオノ如クニ少シクケツリ) 立テ道トナシ中間ニアザラシヲ捕フル ヤリ 及ヒ船ノ破レ (残り) ヲ置ク 此道ヲ横ギルハ悪シ 別ニ折リハナシ 五ニ酒ヲ飲ムノミ 酒ヲ有スル時ハ家ニ帰リテ後身内ノモノノミ酒ヲ飲ムト云フ 葬式ニ用ヒタル物ヲ普通ノ舟ニ入ルハ悪シ 之レ 其舟ハ河上ニ浮ベシ魚類ハ皆 ナ ニガ去ル故ナリト 又タ葬儀ニ用ヒタル鹿ノ肉ヲ家ニテ食スル</p> <p>(下段)</p> <p>際ニ他ノ魚類ト混食スルハ悪シ 必ズ一方ヲ先キニ食シ終リ 然ル後水ヲ飲ミ 而メ一方ヲ食フ然ラザレハ 河ノ神ハ怒リ 魚族ハ河ヲ去ルト (水死人ニ対シテノミ) 土ヲカケル際ニ他人ニテモ土ヲカケテ可ナリ然スレハ 死人ハ感謝スルト 後二度ト墓地ニ行クヤ 他ノ馳走ヲセズヤ (三年間、同月ニ、行キ酒ヲアゲル)</p>	<p>野帳 1.60 (上段)</p> <p>仕度ノ時ハ男子タリトモ アマリ ソバニ行 クコトナシ 又タ死人ヲ運ブニ他人 (近親 者ノ外) ハ手伝ヲセズ 家ニ帰リテ入口ニテ如何ニスルヤ 酒ヲ飲ムヤ 自他ノ隔ナク 皆ヲ飲ム オロッコノ方ハ一概ニ hair ハ brown ヲ帯ビ居ル殊ニ小児ノモノハ 赤ク■リ帯ビ silkish ナリ</p> <p>(下段)</p> <p>死人ノ家ニ帰ルヤ会葬者ハ何レモ ハ例ナリ 火ニ松枝ヲクハ其上ニマタガリテ衣ヲフル</p>
--	---

<p>イナヲ 山ノ神 鹿 鹿区 鹿通 鹿山</p> <p>トウール (オ) シヤーマンハ(鹿)</p> <p>トシチエハル (ギ) 清風ノ時多ク作レガ 病ヲキ時 ヲハ作ル人アリ)</p> <p>ワロバニ (ワロ) (みまきのこ) ヲ傷ニ付ス)</p> <p>ゴヨガソゴソフクリ ギ</p> <p>シヤーマンノ眼ニ取ユル 神 ■ハタルナリト故ニ</p> <p>木ノ先端 イツヲヲ (ワ) (ナヲ) (ギ)</p> <p>ニツケ手ノ如クスル</p> <p>(ギ) ウルンクス ホヌベヤ (オランバ)</p> <p>ウルクス 角ノ根ニ孔アリ ホヌベヤ 各種 及ヒ取リ方 ソロゾ (今日ハ) アヤカンゼゾ (オランバ)</p> <p>サ 草 ニ テ 方 成 ル</p> <p>食スル土 角ノ根ニ孔アリ 各種 及ヒ取リ方</p> <p>犬 舟、エルワンボリ (オ) モホルントウ (ギ) 大漁ノ時 イランガフテ</p> <p>切 口 ヨ リ 雨 ク ス ル 故 根 ハ ク サ ル</p>	<p>野帳 1.61 (上段)</p> <p>トカイ 大ナレハ四尺 脚ノ圍リハ五尺位 角ノ長キハ三尺寸</p> <p>十月 交尾期 八ヶ月ニ産ム 角ノ落スルハ、此期ニ至レハ、雄ノ身ク交尾期ハ 終レハ初マル 十二月十五ナリ 他ノ二月頃分ナリ 雌ノ受胎中 時ノ十ナル間ハ落スルコトナシ 大ニナレハ落スル 天気 時ハ山中ヨリ出ル 交尾期ニナレハ角ノ毛ハヌケル ニテナレハ交尾スル力アリ、此期ニ至レハ、雄ノ身ク交尾スル力アリ、 野生ノモノニシテ雌ヲ持テハ■も、ハ飼育ノモノニテ交尾スルコトアリ 子 籠 ヲシク使用サレシ 野生ノハ飼育ノモノト交尾スルコトアリ</p> <p>(下段)</p> <p>トカイ 大ナレハ四尺 脚ノ圍リハ五尺位 角ノ長キハ三尺寸</p> <p>十月 交尾期 八ヶ月ニ産ム 角ノ落スルハ、此期ニ至レハ、雄ノ身ク交尾期ハ 終レハ初マル 十二月十五ナリ 他ノ二月頃分ナリ 雌ノ受胎中 時ノ十ナル間ハ落スルコトナシ 大ニナレハ落スル 天気 時ハ山中ヨリ出ル 交尾期ニナレハ角ノ毛ハヌケル ニテナレハ交尾スル力アリ、此期ニ至レハ、雄ノ身ク交尾スル力アリ、 野生ノモノニシテ雌ヲ持テハ■も、ハ飼育ノモノニテ交尾スルコトアリ 子 籠 ヲシク使用サレシ 野生ノハ飼育ノモノト交尾スルコトアリ</p>
---	--

野帳 L.62

(上段)

5 (大2) ポント
 4 (男2女2) ギ チエレブユンヌ (アンジュット)
 6
 4 (夫妻ニ小供) ニコス
 7 (姥、兄弟、主、小四人) クタスケ
 6 (主、姥、子) チエッタカ
 2, 3 ルカ
 3 (大2、小1) 内一人 カラノ子
 ホモガンー 小3 大5
 ビシヨング ムヌ 小2 / 中一人へ■■子 大3 夫妻ノ外に男
 ペムルシ 大2 小4 女 (小供)
 チェルム、ヌ 大 大4 小1 / 外男 (夫ノ兄弟)
 カスペ 大2 小5 女3 男2
 ボーコンヌ 大5 小2 女2 内一人へ妻
 5 (大2小3) ボンメ (六十位) 先妻ノ子二人
 7 () クシヤレ
 4 () グヤシヤ

シヤ
ガレ

サン
ノ
シケ

ジ
ヤ
マレ

(下段)

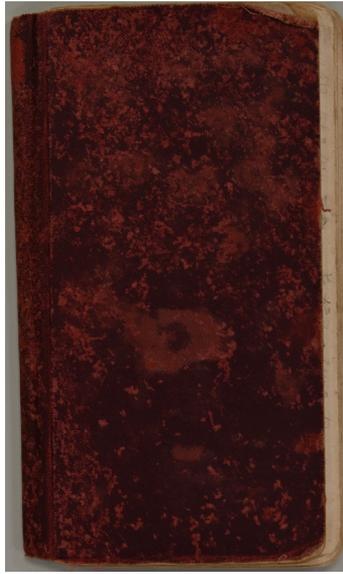
フレジウ

4寸 五十

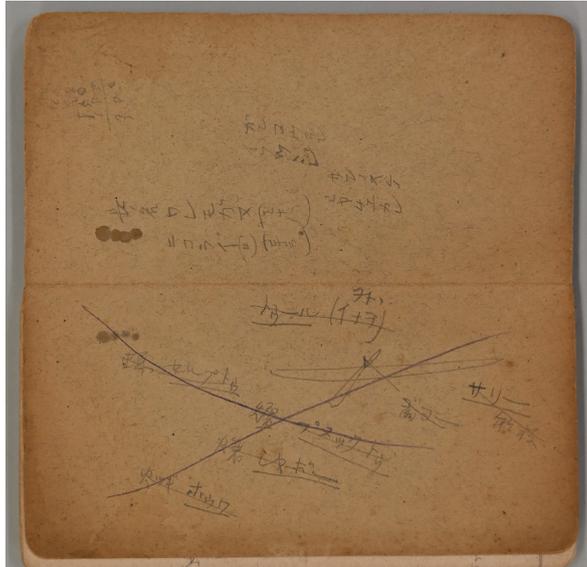
アツチラ (カラノ 三番目ノ 弟) 四十位

ト
ノ
間
子
兄弟
ニ
サン
ダ
(男)
トオロツコ
女
ワンボグダ (女) トウサガノ妻ノ母
マガウダ (女)
ガイカス
グ (s) ージェヌ

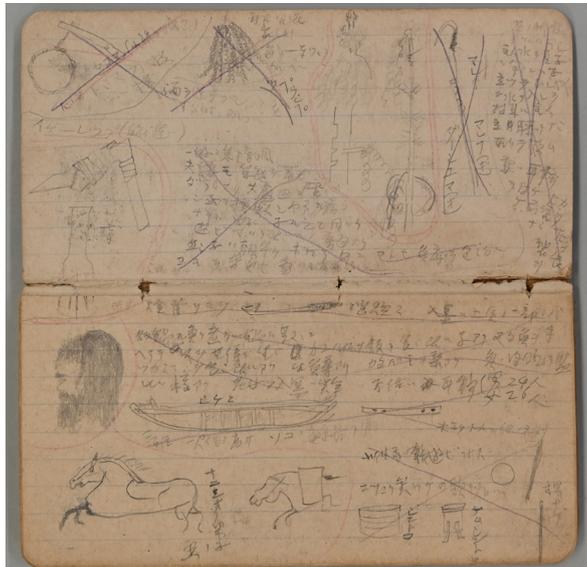
野帳1_0



野帳1_1



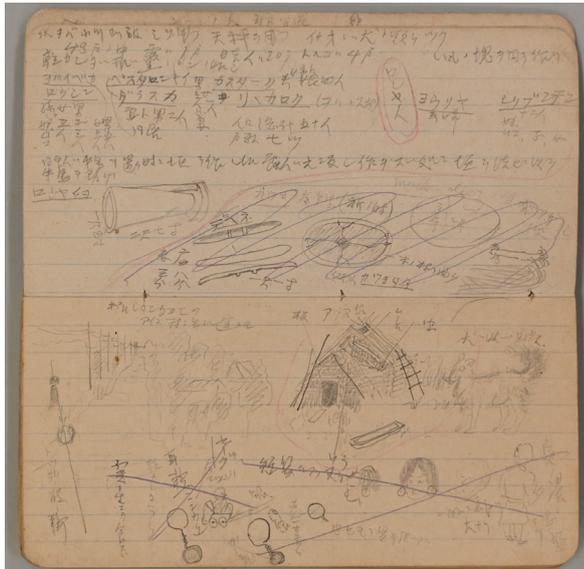
野帳1_2



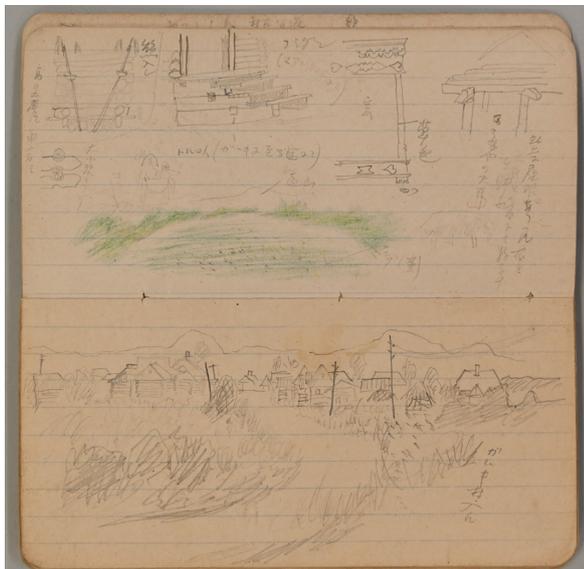
野帳 1_3



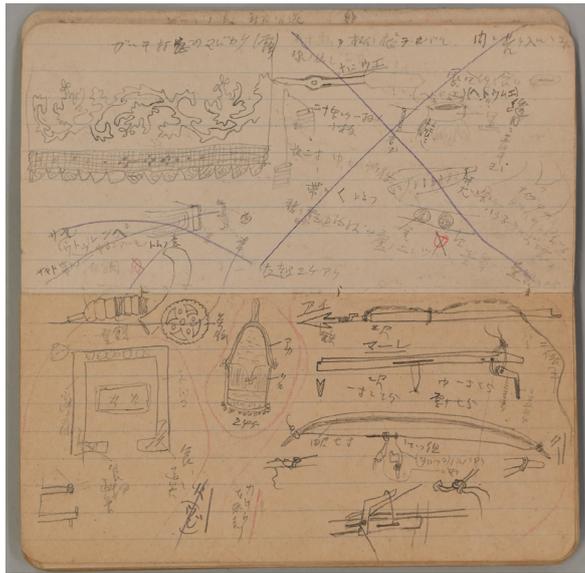
野帳 1_4



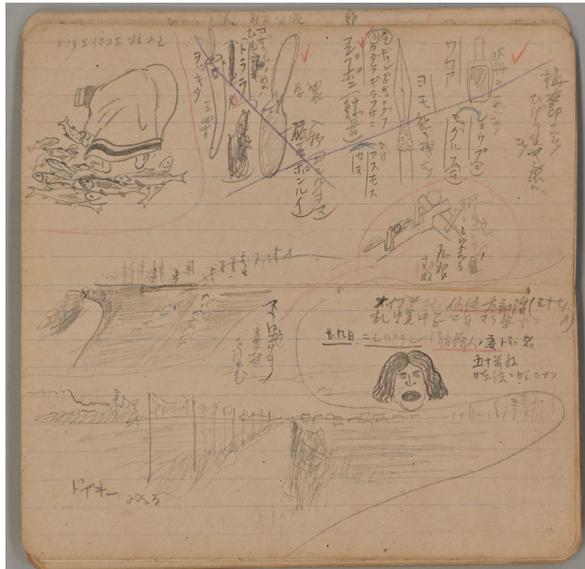
野帳 1_5



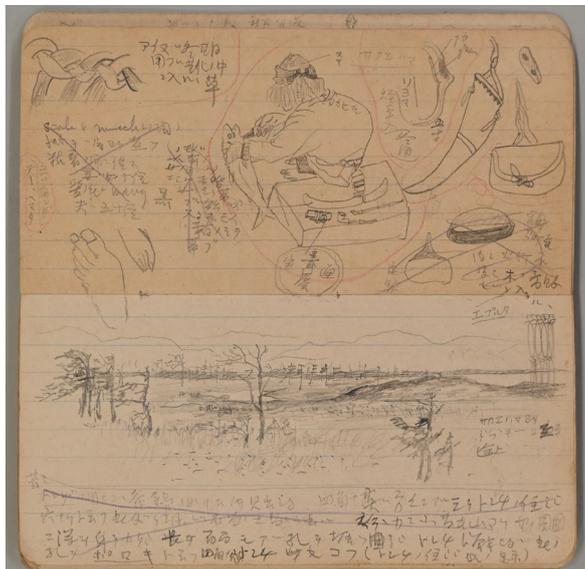
野帳 1_6



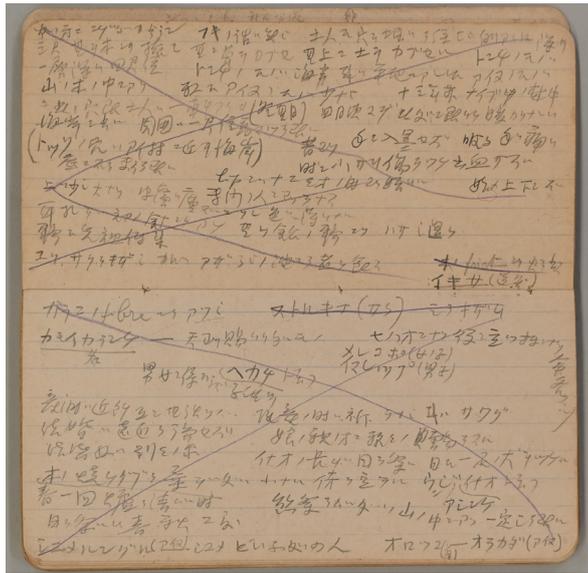
野帳 1_7



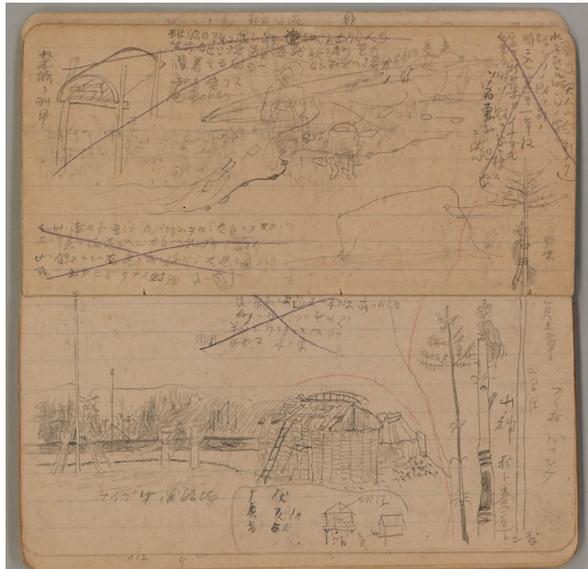
野帳 1_8



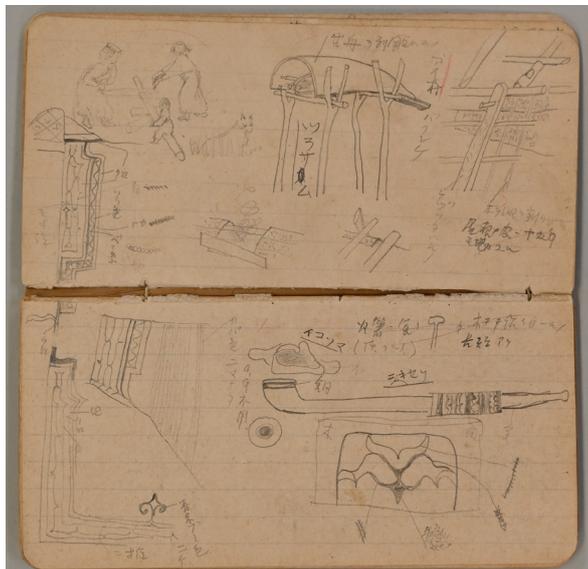
野帳 1_9



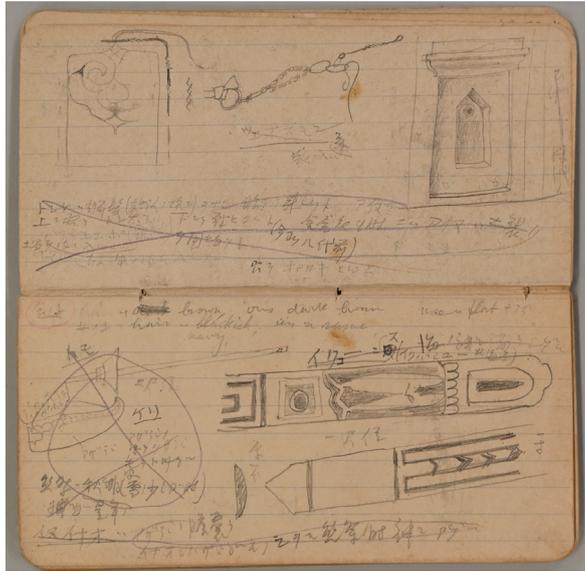
野帳 1_12



野帳 1_13



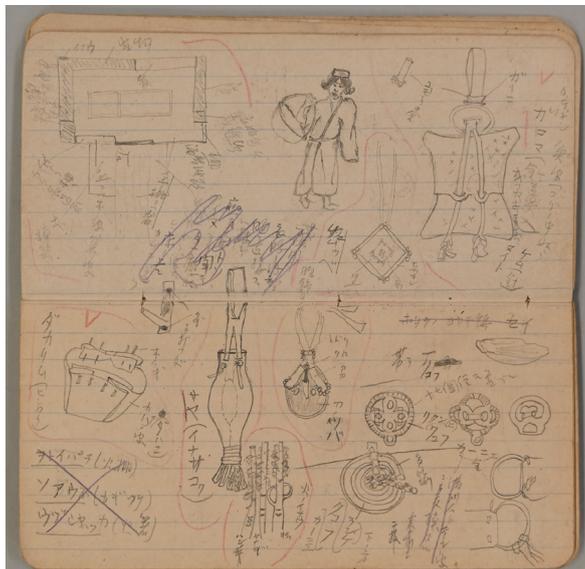
野帳 1_14



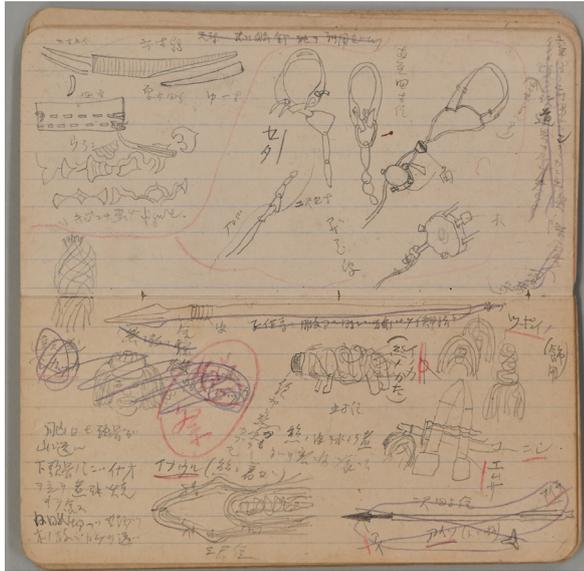
野帳 1_15



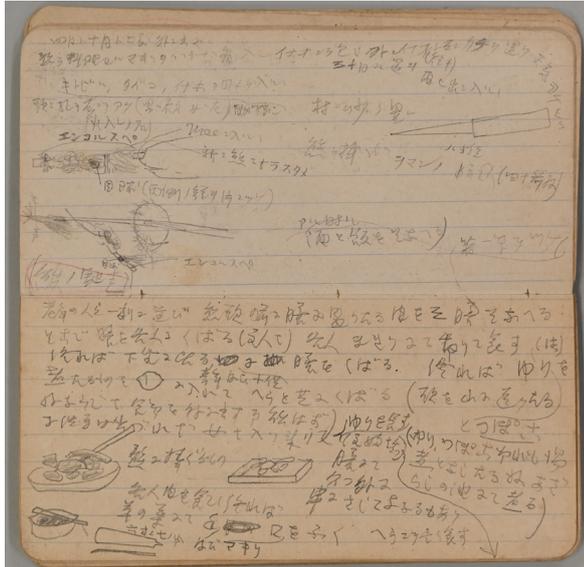
野帳 1_16



野帳 1_17



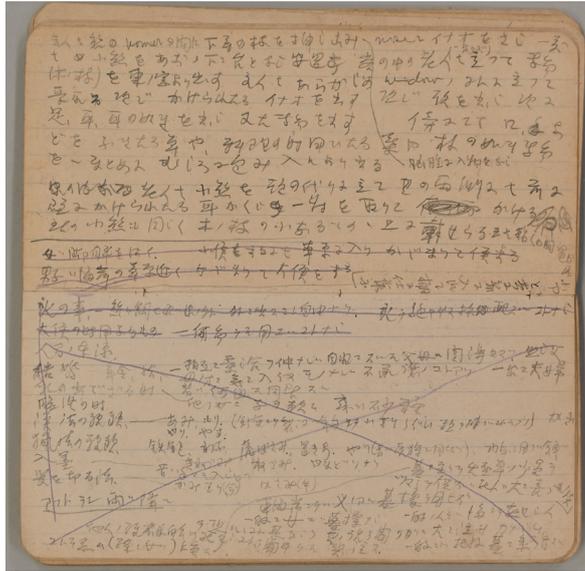
野帳 1_18



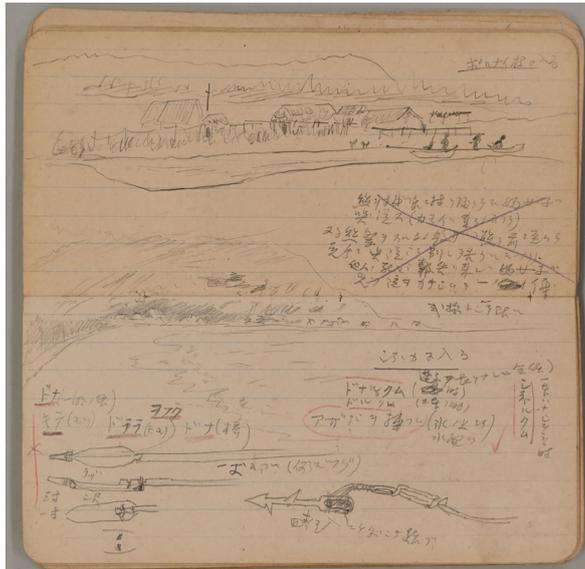
野帳 1_19



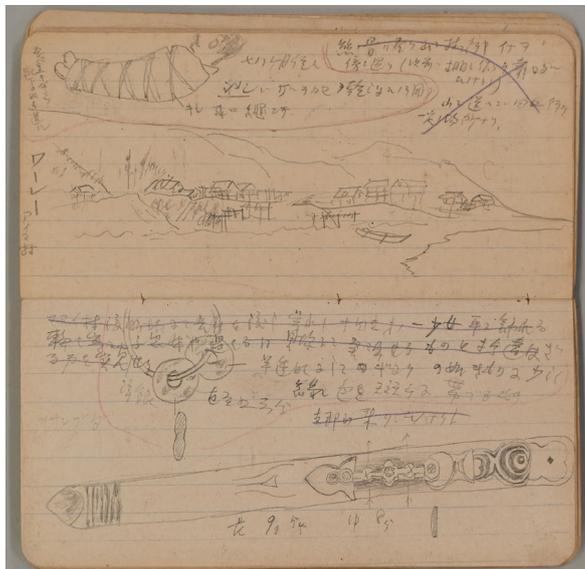
野帳 1_20



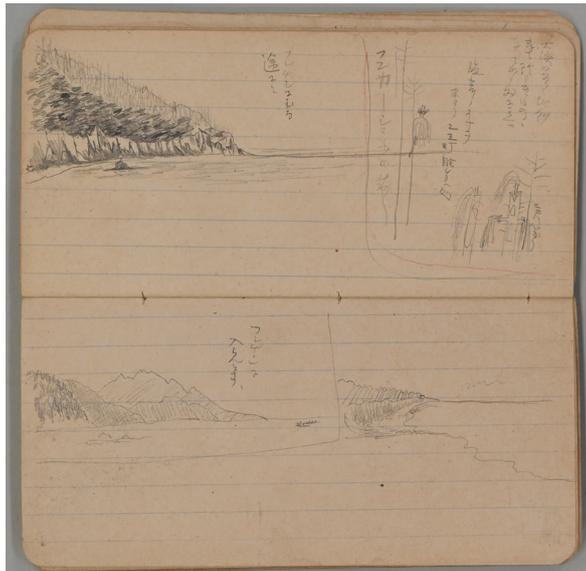
野帳 1_21



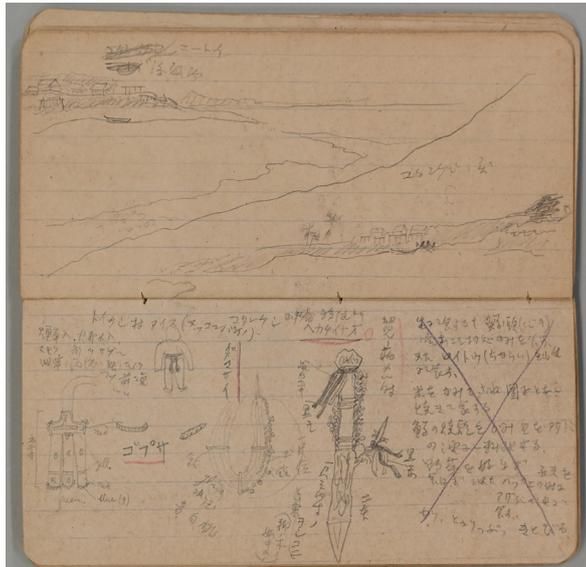
野帳 1_22



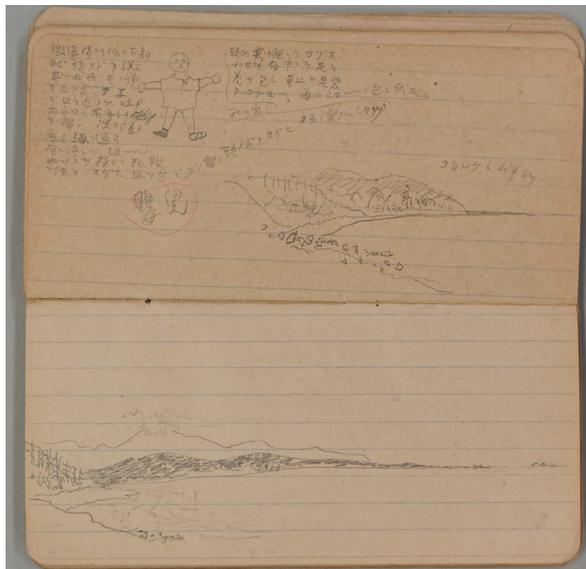
野帳 1_23



野帳 1_24



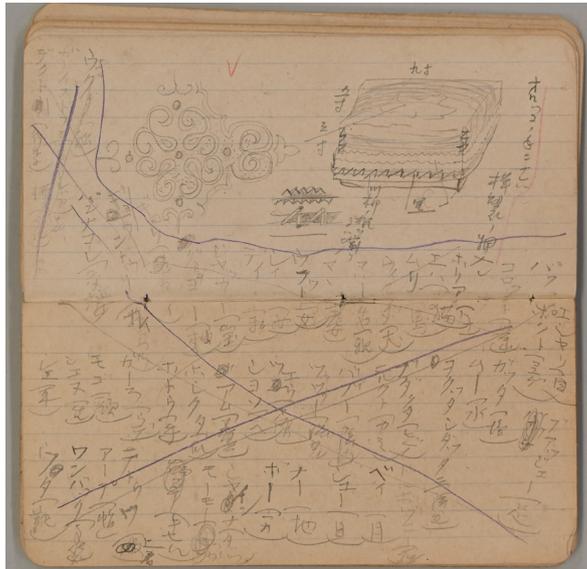
野帳 1_25



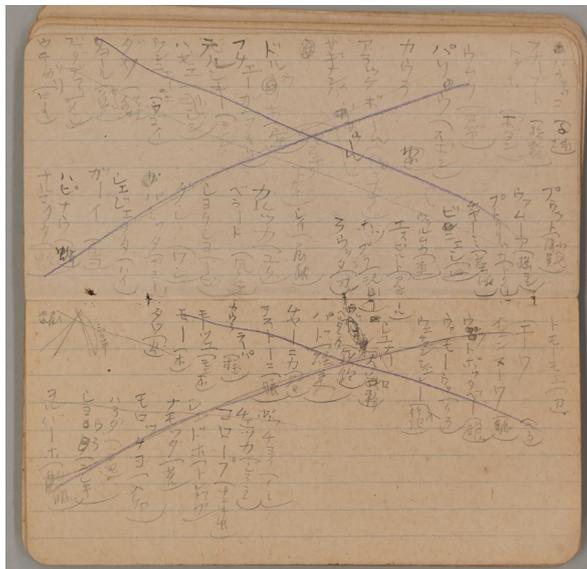
野帳 1_26



野帳 1_27



野帳 1_28



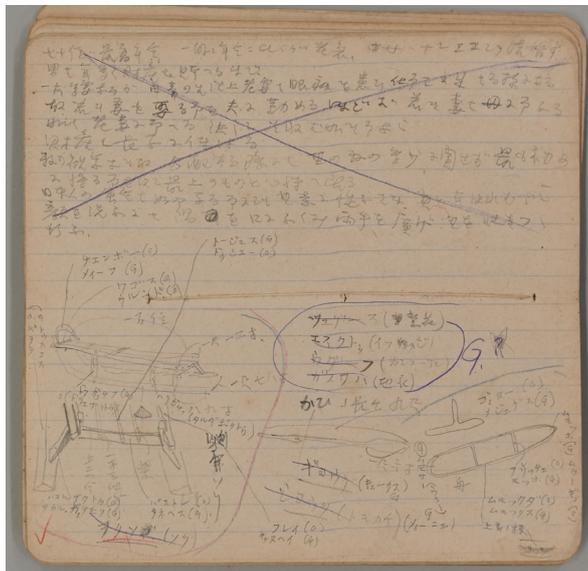
野帳 1_29

Handwritten Japanese text on a lined page, likely a field note or journal entry. The text is dense and appears to be a list or a series of observations, possibly related to the study of insects or plants. The handwriting is cursive and somewhat difficult to read in some places.

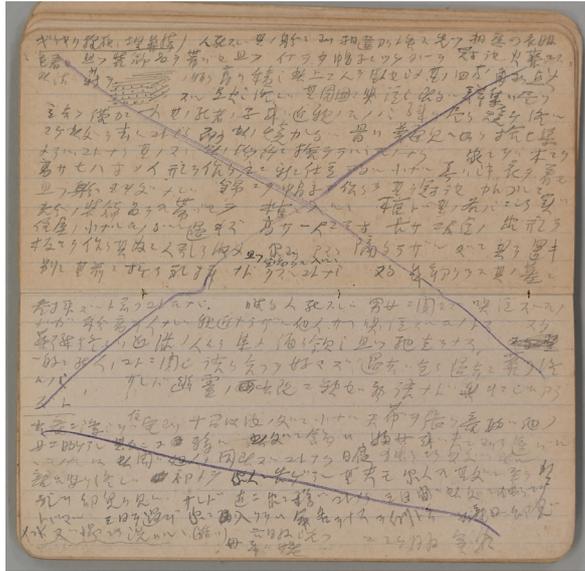
野帳 1_30

Handwritten Japanese text on a lined page, continuing the field notes. This page includes several lines of text and a small diagram or sketch at the bottom, which appears to be a cross-section or a detailed view of a biological specimen. The text is written in a similar cursive style to the previous page.

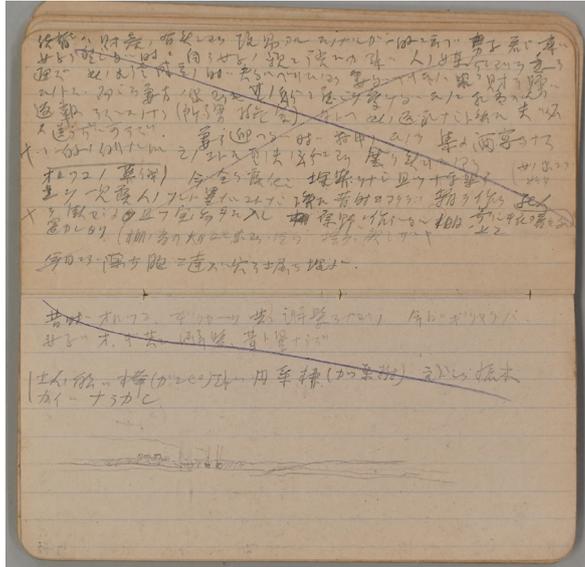
野帳 1_31



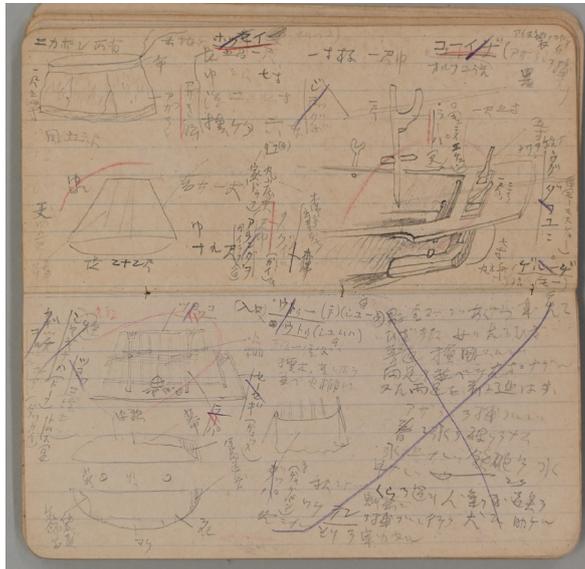
野帳 1_32



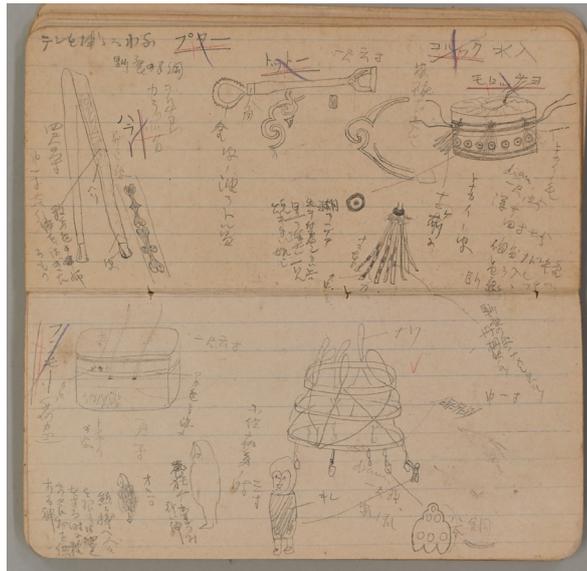
野帳 1_33



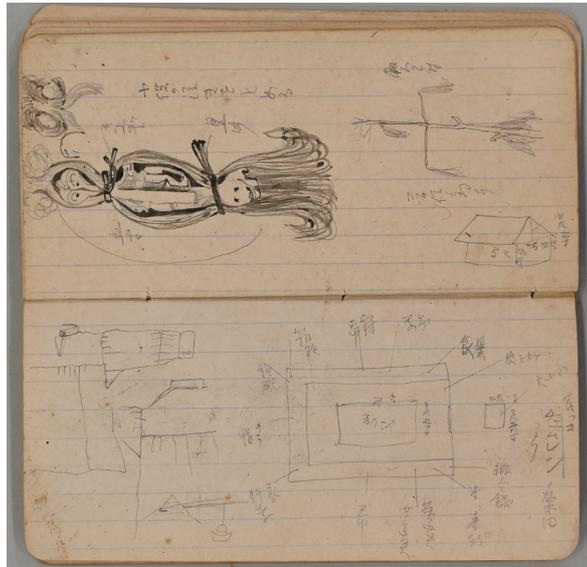
野帳 1_34



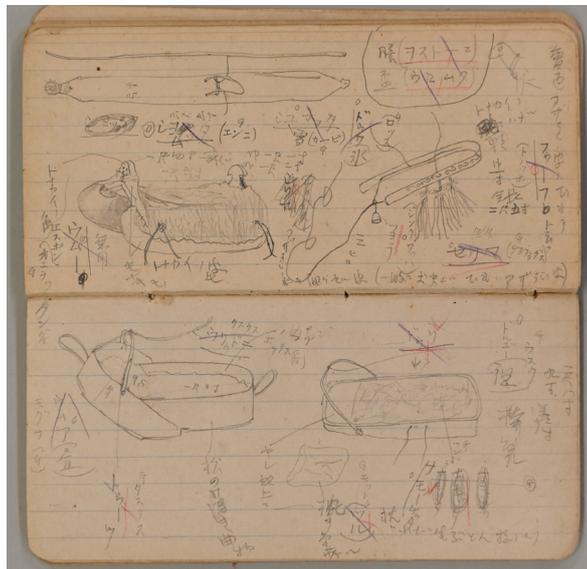
野帳 1_35



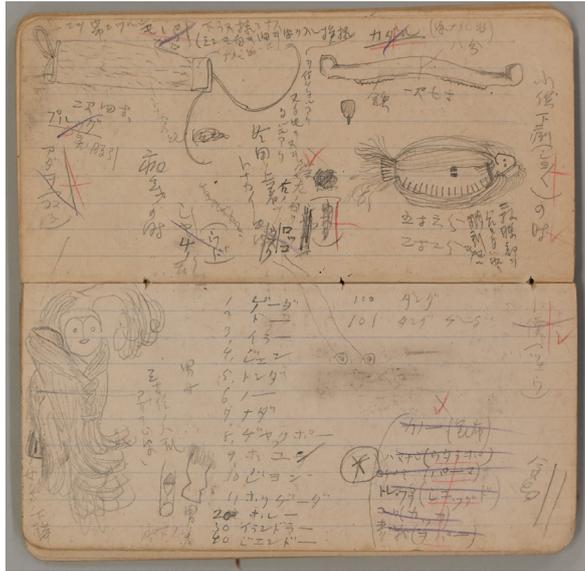
野帳 1_36



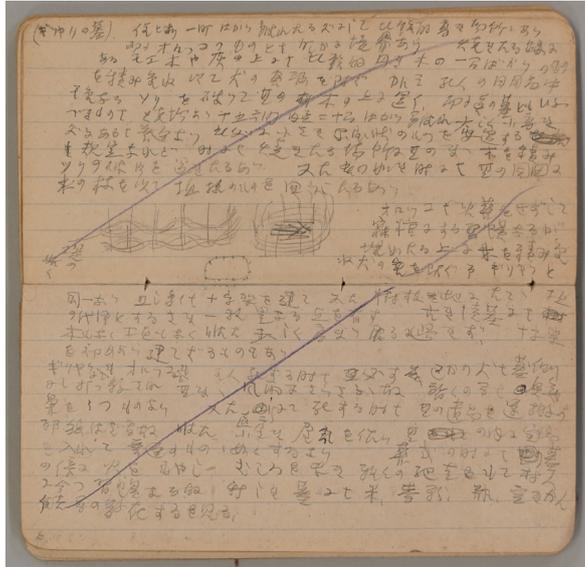
野帳 1_37



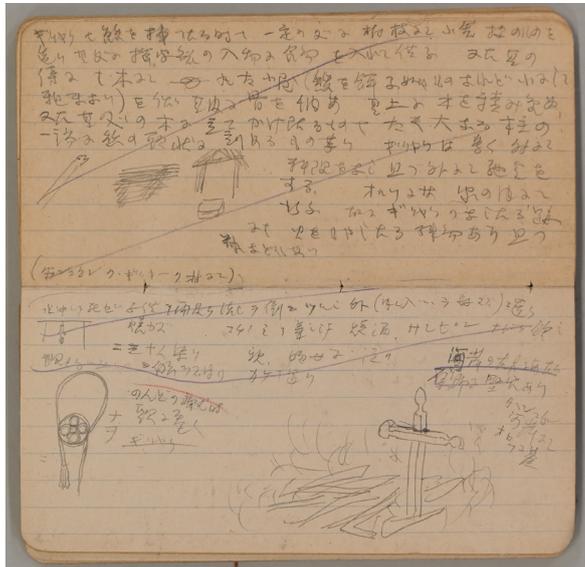
野帳 1_38



野帳 1_39



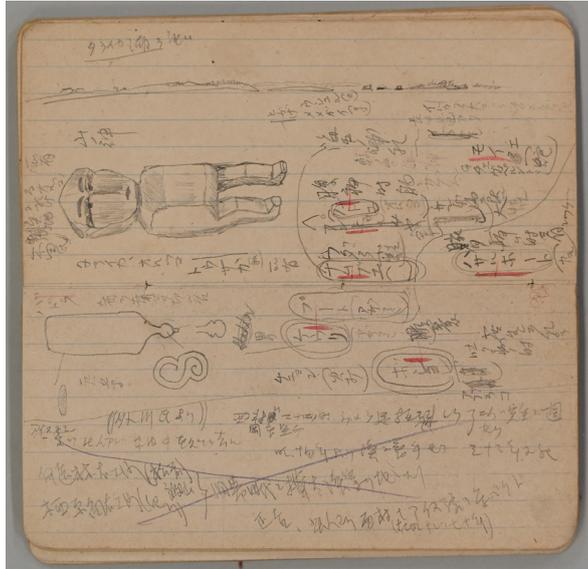
野帳 1_40



野帳 1_41

野帳 1_41
Handwritten Japanese text on a lined notebook page. The text is dense and includes several lines of notes, some of which are crossed out with a diagonal line. The handwriting is in cursive (sōsho) style. There are some small diagrams or symbols interspersed with the text.

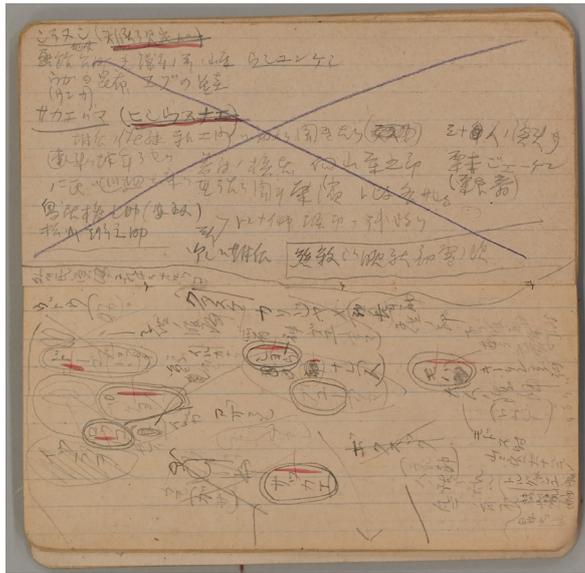
野帳 1_42



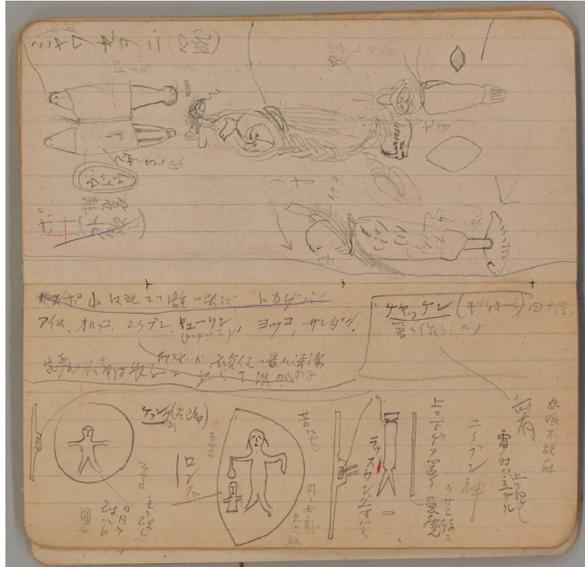
野帳 1_43

野帳 1_43
A page from a field notebook containing handwritten Japanese text. The text is organized into several sections, with some parts crossed out by a diagonal line. The handwriting is in cursive style. There are some small diagrams or symbols interspersed with the text.

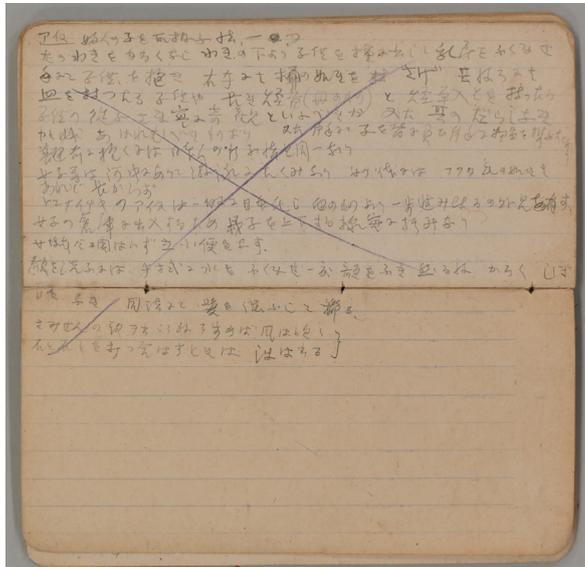
野帳 1_44



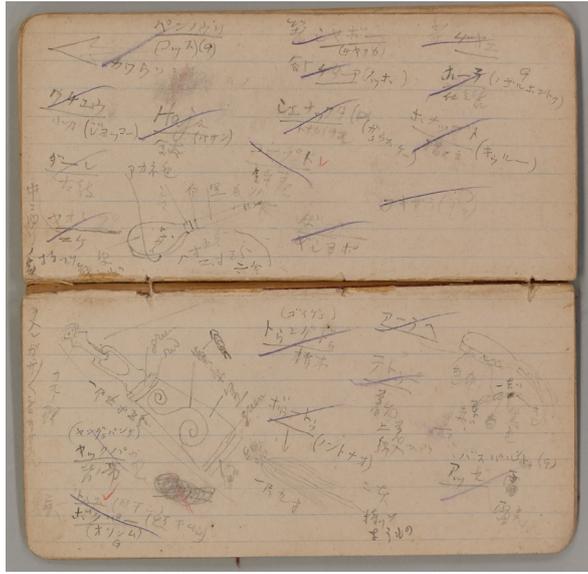
野帳 1_45



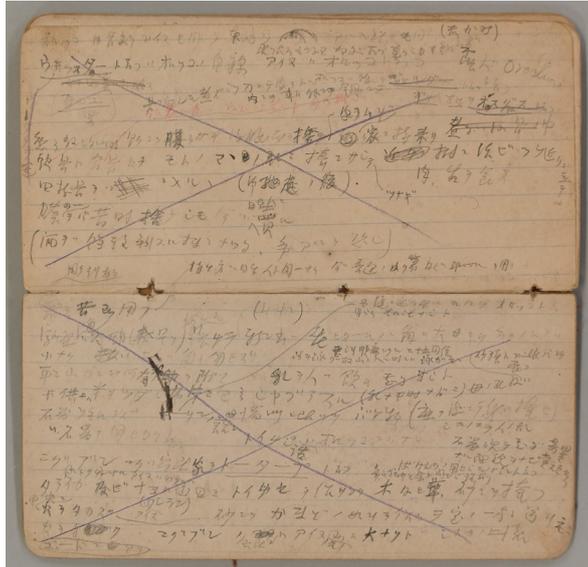
野帳 1_48



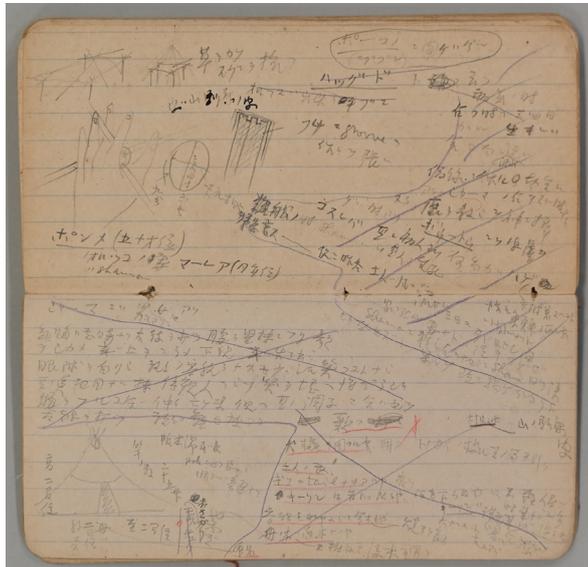
野帳 1_49



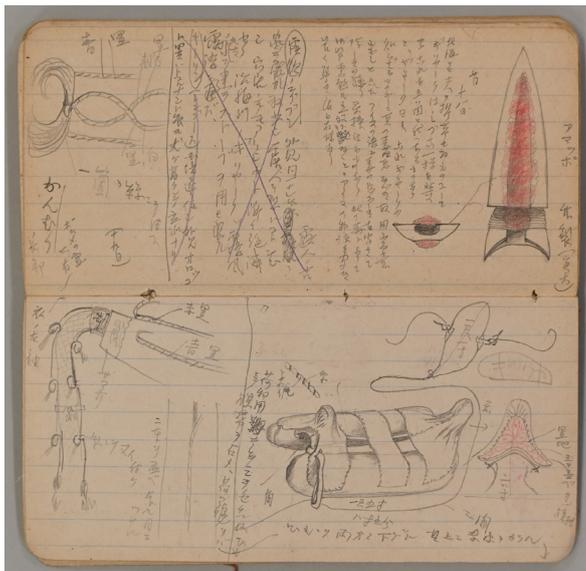
野帳 1_50



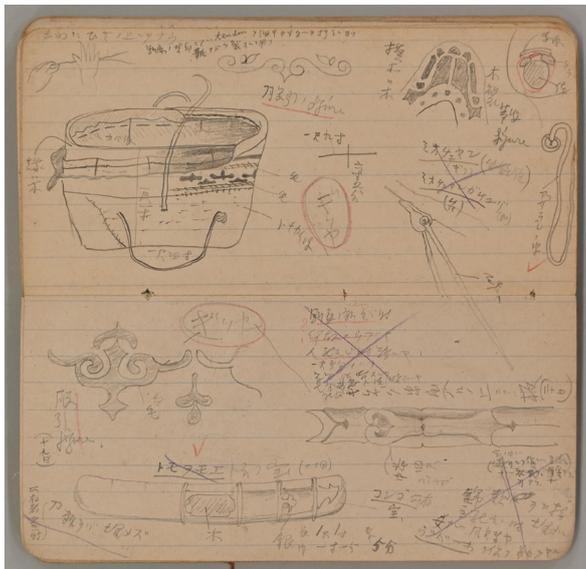
野帳 1_51



野帳 1_52



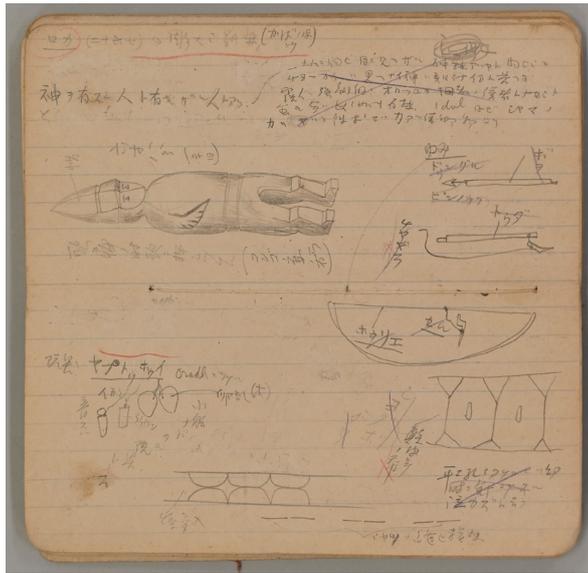
野帳 1_53



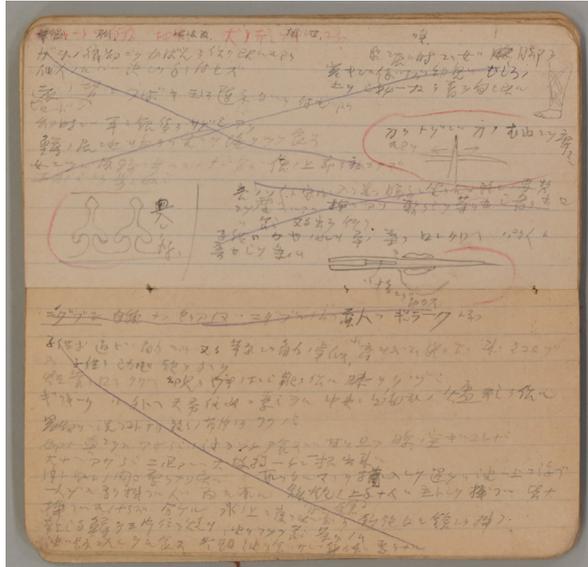
野帳 1_54



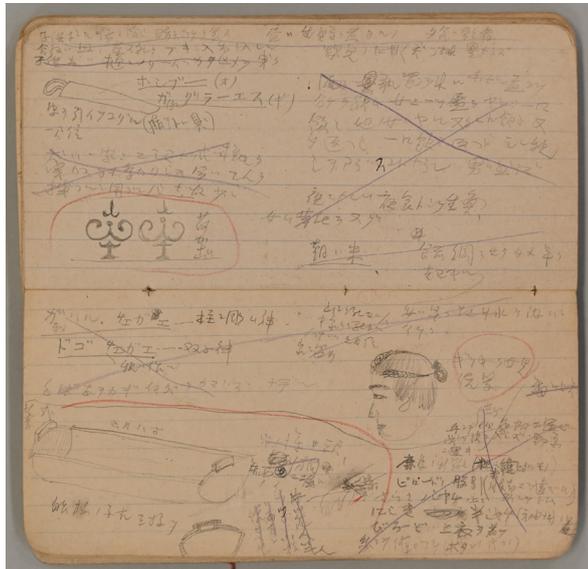
野帳 1_55



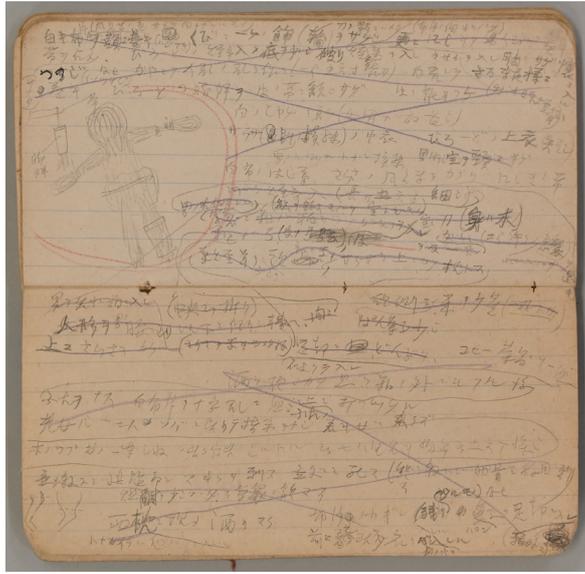
野帳 1_56



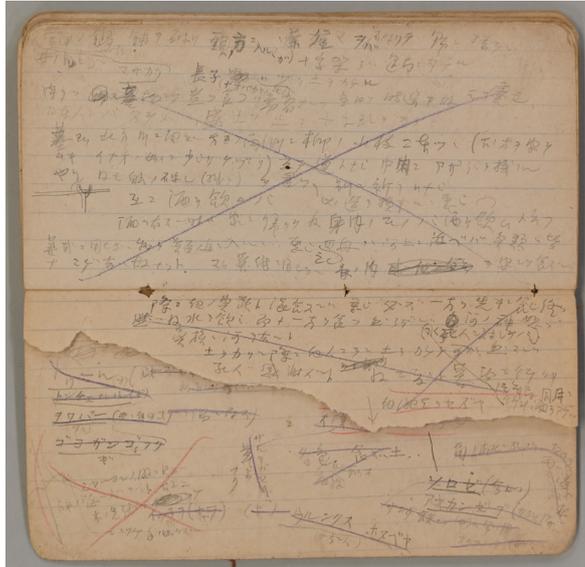
野帳 1_57



野帳 1_58



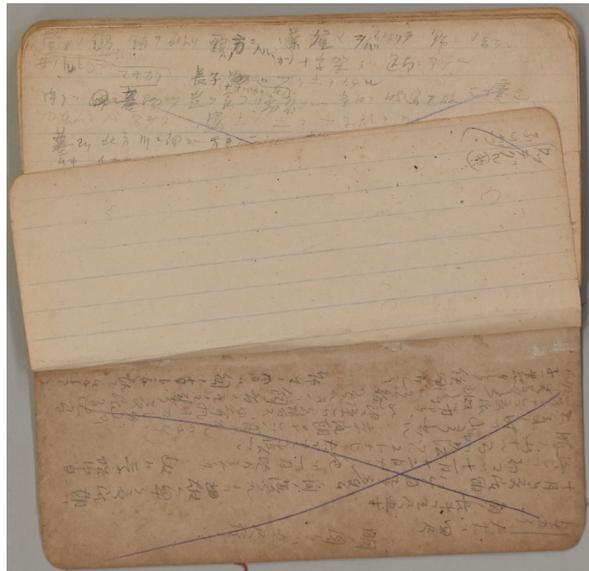
野帳 1_59



野帳 1_60



野帳 1_61



野帳 1_62

